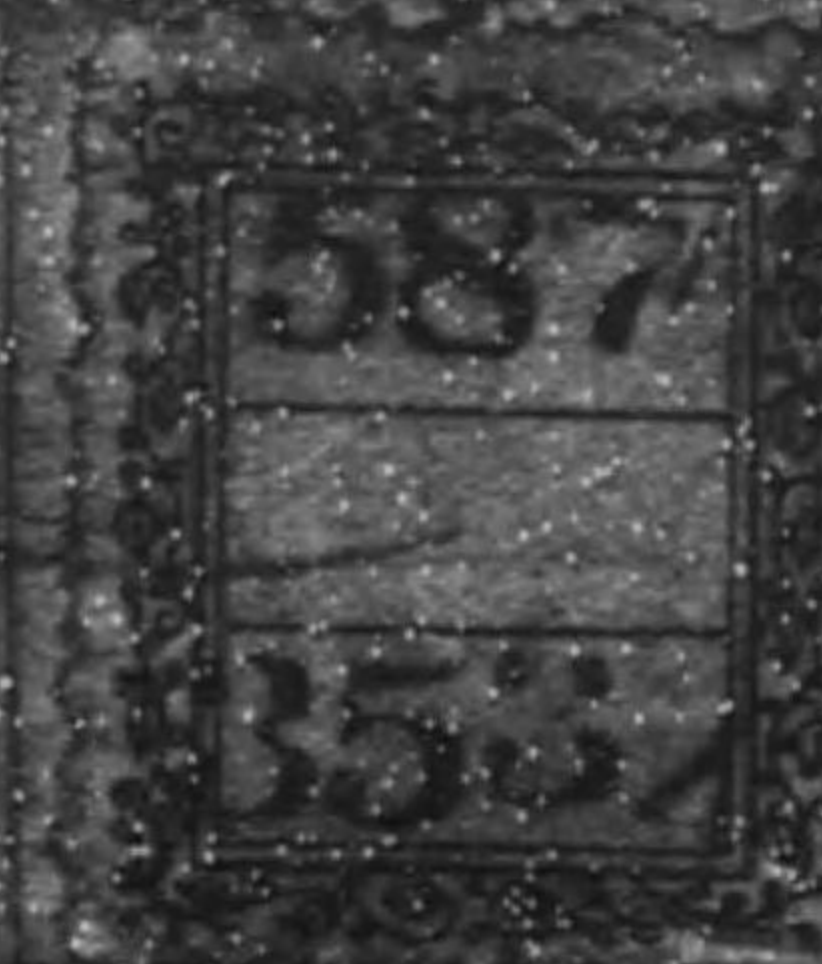
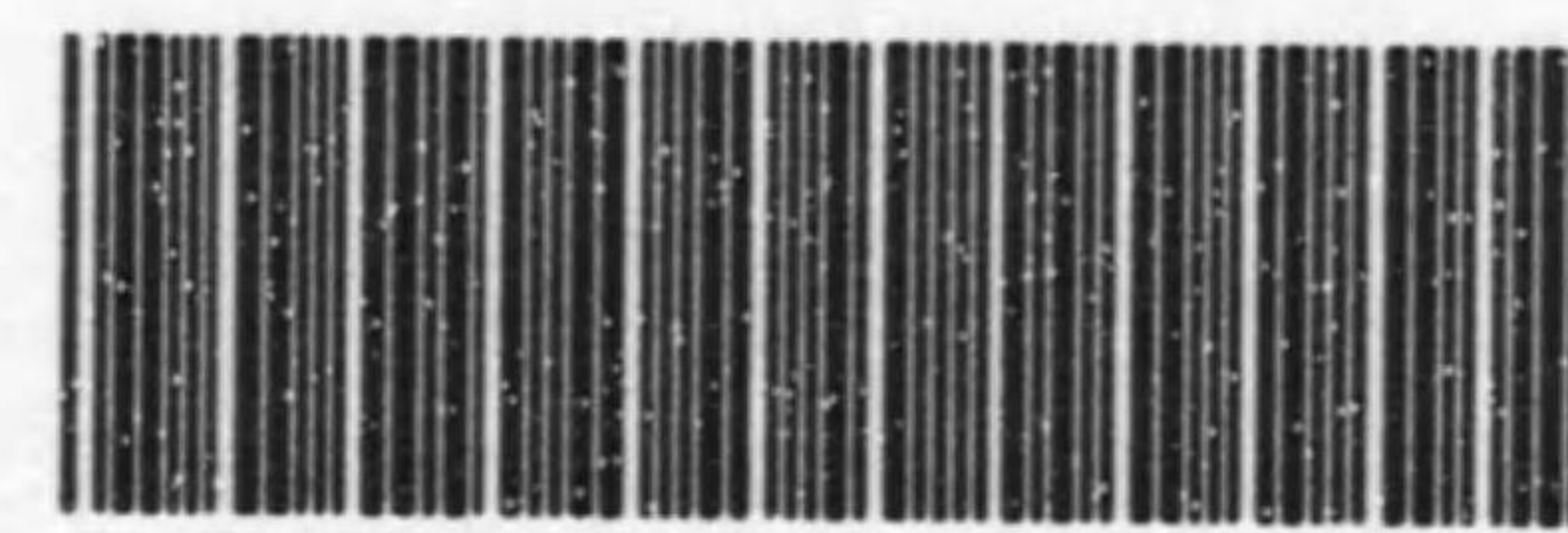


帖 風 秋



男 國 田 柳



* 0 0 5 3 3 5 4 0 0 0 *

0053354-000

587-3531

秋風帖

柳田国男・著

創元社

昭15

AIA

秋風帖



柳田國男

531



柳田國男著

秋

風

帖

創
元
社



587-3531



自序

これは私の最も自由なる旅行の一つであつた。前にも好んで路程を變へて見ることはあつたが、此時ばかりは始めから計畫といふものが無かつた。駿州の焼津で汽車を降りてから、成るべく鐵道と筋かひにあるいて見ようとして大井と天龍との間を幾日かうろついた。磐田引佐の堺の尾根づたひに、昔の秋葉路を逆に八名郡へ抜ける氣になつたのは、濱松で色々の話を聞いた後であつた。こゝでは熊村までの二日路を、中村修二君が同行してくれられた。

三河の新城では今和次郎君が跡から遣つて來て私を捜しあてた。さうして共々に作手の山村に、入つて見ることになつたのである。作手の秋色と故事人物とは、

殊に奄留に適するやうに思はれたが、我々は遊歴人の氣持にはなり切れなかつた。忙はしく郡界川の水の流に追隨して、下山の客舎に一夜を明かし、その次の日は既に松平の故邑を見物し、九久平岩津くすたひらを通つて、黄昏に岡崎の御城下へ出てしまつた。此間の記事は本文が之を詳かにして居る。菅江眞澄の足跡は消えて居たけれども、彼を生み育てた故郷の土の香には、又改めて大いなる親しみを持つことが出来たのであつた。

幡豆はづの海沿ひは二十年餘り前に、船から見て通つた懐かしの村里であつた。ここに一日の逍遙を試みる爲に、私だけは後に残り、今君は又別の旅に立つてしまふ。次の日は岡田撫琴氏の自動車に送られて、岡崎を辭し矢矧の上流を渡り、母の町に来て草鞋を買ひ、靴を再び荷持のカバンに結はへ附けた。但し此邊の人は足は自轉車に乗つて、さつさと先へ飛ばして案内などはしてくれない。半分途も

行かぬうちにもう向ふから戻つて来て、たしかに置いて参りましたなど、澄まして居る。西加茂の山村は家毎に瀬戸の陶器用の石粉を搗き、岡を片端から切崩しては鄰國へ賣つて居る。明るい眞白な、しかし落莫たる光景であつた。猿投さなひの靈山の麓の里のみが、獨り此間に於て幽邃であつた。私は土地の考古家小栗鐵次郎氏を頼んで、巴の紋を描いた左鎌の、堆かく積まれて居る御社を参拜し、それから夜に入つて飯野といふ村の、古風な旅籠屋に辿りついた。

翌朝は美濃の柿野の郷へ、僅かばかりの一つの峠を越えた。地圖には名を掲げてないが昔からの大切な道路と思はれた。尾張と三つもあひになつた三國山の東の腰で、その三國山こそは年に一度、地方に漂泊するサンカ族の寄り集まつて、宴樂し又妻問ひをする會場として著名であつた。柿野には柿の園すでに衰へ、鳥網張るわざばかり愈々盛んである。山の北面は見渡す限り、竹で圍うた鳥屋が高

い處まで立て連なり、日の中は人の往來が繁かつたのみならず、「秋山のスケッチ」に見るやうな兩縣の交渉が、此間に行はれて居るのであつた。

しかも此谷の口になつた山の尾崎を一つ曲ると、再び石の粉の白く漲る里續きであつた。部落をシマといふ古い言葉は残つて居るが、それを繋いで居るのは、竝木も無い新式の繩手路であつた。石を工場へ運ぶ荷馬車が、ひどい土埃を浴びて絶間も無く下つて行く。その一臺に私の荷物は托して、暮近く多治見の町に入つて見たが、こゝでは何としても獨り宿するに堪へなかつた。それから更に自動車を備うて、兼山の少し上手で木曾川の橋を渡り、燈の光靜かなる太田の町まで遣つて來た。こゝには紙上の舊知林魁一君が住んで居る。家はこの古驛の制約に依つて、高い防火壁を取附けたる巨大なる萱葺きであつた。夜深く提灯をともして後園の柿をもぎ採り、その種類の有るだけを盆に盛つて、携へて旅店に來て遅

くまで話をしてくれた。其夜の話柄は今でも大半は記憶に存して居る。

次の日は其柿と合乗りして、岐阜に出て久しぶりに汽車の客となつた。大垣の町に下りて見ると、こゝには共進會があつて數限りも無い柿の實が出陳せられて居る。山々の美しい秋の日の光が、流れてこの公園の一隅に淀んで居るやうな感があつた。それから車を馳せて揖斐川右岸の新らしい川除堤を、海津郡に入つて今須高田の町を歴訪して見たが、河川工事の爲めに交通系統は全く改まり、持つてあるいた地圖は用に立たず、以前津島の天王様の試樂の日に、遠く太鼓の音を出て聽いたといふ村なども、もうどの邊であるやらわからなくなつて居る。天野信景が浪合記を見つけ出した時代に比べると、尾張は西美濃からずつと引離されてしまつたやうな氣がした。

その晩は桑名の船津屋に泊つて、曾て此欄干に依つて千鳥を聽いた頃のことを

想像して見た。水陸の變化は伊勢灣頭に於て、殊に送迎にいとま無きものがあつた。人間の遺物はほゞ舊形のまゝであるが、歴史は既に遠干潟の如く、遙かに目路のあなたに引退いて居る。此岸ばかりから物を觀てはならぬと思つた。それで船の路の次々に改まつて來たことを考へて、急に紀州の加太浦かたを見る氣になり、出來るならばそこから淡路へ渡つて行かうと思つた。

翌日の汽車では、伊賀と大和とは素通りにして、直ちに紀ノ川の右岸まで出て見たが、五條以西は私には生路であつた。粉河の觀音の御寺には、古い同志の逸木盛照師が居られる。今では宗務に携はつて不在勝ちの様にも聞いたが、結縁の爲に汽車を下りて參拜した。果して上人は留守であり、境内も至つて森閑として居て、そこらを見巡るうちに自分へ話しかける者は、たゞ古い讀書の僅かな記憶だけであつた。懐かしいと思つたのは後代の兒文珠ちこもんじゆ、さては武藏の深大寺などに、

移し傳へられて居た神童文學が、茲では千年も前から既に花やかに展開して居たことである。龍宮も寂光淨土も皆それであつたが、我々は終始民族固有の幻しを透して、この渡來の教法を渴仰して居たのであつた。本堂の片隅にいさゝかな手細工物を額に上げて、「おらくをさめたてまつる」と拙ない文字で書いてあるのも、何か大きな現象のやうに私には感じられた。こゝの繪馬堂には長州の講社の名が多く、それが大抵は船方であるらしいのも、思ひ掛けぬ發見であつて、それから今日まで心にかけては居るが、まだ其由緒をつきとめることが出來ない。

加太は私が想像して居た以上に、十二分に既に漁村化して居た。久しく磯の香の間に立ち盡して居たけれども、遠國の言葉などは一つだつて耳に入つて來ない。濱は土地の人ばかりの、むつまじい休養場であつて、淡路へ渡る船ももうこゝからは出ない。淡島様の御社では、紅い小さな紙の人形を、婦人の御守りとして出

して居るだけで、今でも數多く田舎を巡つて居る修験者の、本山らしい様子などは少しも無かつた。夏はやつぱり海水の御客だけを喚ぶやうに、宿屋の支度も改まり、風景も亦それに似つかはしくなつて居る。或は要塞あたりの干渉であつたかも知れぬが、兎に角に湊は案外に早く忘れられるものだと思つた。

そんなら今度は瀬戸内海の方はどうなつて居るか。序に見て置かうといふ氣になつて、次の日は大阪に出て来て、夕方の下りに乗つた。是だけは昔の旅行には望めないことである。汽車を一夜の宿にして次の朝はもう廣島に降りて居た。それから宇品へ行つて東へ行く乗合船を物色すると、ちやうど何箇處かの島の村に寄りつゝ御手洗みでらいまで行くといふ船がある。大崎下島は今の名を大長村と謂ひ、舊友の五領田君が村長をして居る。島の蜜柑作りも歴史は至つて古いが、それよりもこゝは桃の名所として知られて居た。更にもう一つの世に名高い理由は、勿論

地形であり風を頼りの航運法ではあつたが、土地にもそれと調和するだけの機關が、中古以來備はつて居て、それで此湊を若い冒険者たちに、忘れ難いものにして居たのであつた。だから船の構造が變り帆が改良せられて、水路は昔の通りで無くなつても、景氣のよい間は來て繋がれる船が多かつたのであるが、そんな心元ない力だけでは、永く外側との交通を保つことは難い。湊が受身の繁榮によつてその觸角を失ひ、孤立の危険を感じる例は他の地續きの土地にもあらうが、島では脱却の必要が一段と急である爲に、誰にでも早く氣が付くのである。

手舟の利用の衰へてしまつたことは、一度はすべての島と岬の村里を、非常に淋しいものにしたやうである。海は大道であるけれども常設の航路の外に立つと、朝夕互ひに見かはして居ながら、少しも消息を知らずにたゞ竝んで居る島の多いことは、平野を旅する者の推想の外であつた。私は大崎下島の技師某君に伴なは

れて、一旦尾道へ戻つて生口の島へ渡り、瀬戸田から峰を越えて南の磯づたひに、原とかいふ部落に来て小舟を見つけ、對岸の伊豫の岩城島に送つてもらつた。それから案内も無しに此島の山路を經廻つて、更に生名に渡り又因島に渡つて、漸く乗合船を得て、汽車のある陸地へ歸つて來た。尾道の浄土寺山に登つて見ると、海が七つの湖水のやうに見えるといふ程、此あたりの島山は重なつて居るのだが、縣が異なる限りは中心も別々であつて、其間の交通が思ふやうで無いのみか、同じ一つの地塊に據りながらも、端と端とは丸で心持のちがつた島人の、住んで居る場合さへ稀で無いらしい。全體に農を重んじ漁を輕んずる人たちが、移つて拓いた村里が多いやうに思はれた。今では事情も大いに變つたらうが、まだあの頃までは瀬戸田の町のやうに、船を持つて弘く世間を試みて來ようといふ氣風は、此邊ではさう普通で無かつた。單なる成行きが土地の幸福を支配して居る點は、

山奥の村などゝ異なる所が無かつたのである。

しかも一方は外部の刺戟が單純であるだけに、どこでも大よそ似たやうな道筋をとつて、變化して行かうとして居るに反して、島の境遇は一つくが違つて居た。斯うして一望の裡に羅列して居る生活にも、何れを代表として他を類推してもよいといふ箇所が無い。細かく分けて見るならば瀬戸内海の島々は、或は數百の小さい社會であるかも知れない。是はどうしても志を起し、もう一度計畫を立ててゝ見てあるかなければならぬと、深く心に念じて其時は歸つて來たのである。それが知らぬ間に早くも十何年の歳月を隔て、今は僅かに物の序を以て、残んの思出を辿るばかりになつたのは、誰よりも先づ自分に對して濟まぬ話であつた。旅は一生のうちに見たいと思ふ處を、見盡してしまへばそれでよいと思ふのは、單なる逸民の我慾に他ならぬ。是を身の學びとし又世の知識とする爲には、今日

は殊に短い期間に、努力して廣く遠く經廻する必要がある。土地の事情が刻々に移り變つて、今と前年とを比較することが難いからである。自分は壯年以來、幸ひに多くの機會に恵まれて居たけれども、なほ一念の貫徹を缺いて居たが故に、結局一端を知つて他の半面を推斷するやうな、最も覺束無い近代の流俗を、脱出することが出来なかつたのである。

紀行は全體誰が讀むものかといふことも、今更ながら問題とせざるを得ぬ。實地を知らない人たちへの案内の書であるならば、此本などは餘りにも説明が拙であり、又餘りにも筆が省いてある。或は膝栗毛のやうに知つて居る人々の爲に、共同の興味を抱かしめるものとしては、私の通る路はいつも稍片隅に偏して居た。當時自分ではまだ心付かなかつたけれども、やはり僅かばかりの同じ道を行かうとする人の他に、主としてはその土地の住民の、目に觸れることを期して居たら

しいのである。前代の旅日記の類には、斯ういふ讀者を豫想したものは稀であつたらうが、しかも今日となつては此人たち以上に、深い關心を以て之を讀む者は他に無い。紀行の目的とする所は時世と共に變らなければならなかつた。私などの觀察は精確で無かつたかも知れぬが、兎に角にこの新らしい需要に應じたもので、それが事實を見誤つて居らぬ限り、いつかはその土地の人に認められて、或は記録無き郷土の一つの記録として遺るかも知れぬ。

率直なる外部の批判は、實際は甚だ耳に入り難いものである。是が新聞によつて即刻に頒布せられ、容易にその誤謬を訂正し得るといふことは、今少し利用してもよい新時代の便益であつた。たゞ私は此方面に不馴れである爲に、いつでも文章の効果を危ぶむやうな念があつた。殊に旅先で物を書くといふことが不安であつて、長く續けて行けなかつたのは残念である。大正九年は私一箇の爲に、最

も記念すべき旅行の年であつた。前後三篇の紀行を草して東京朝日新聞に載せて居る。その第三の海南小記は、早く一冊の本として世に公にし、最初の東北紀行も之に次いで「雪國の春」の中に載せてある。獨り其中間の「秋風帖」のみが、いつ迄も切抜のまゝで保存せられてあつたのを、今度思ひ立つて書物の形にしたが、よく見ると其分量が少し短か過ぎた。それ故に二三同種の文を其後に附加へ、別に此一篇の追憶記を序文の代りに卷頭に掲げることにした。此頃久しく旅をして見ぬので、筆も脚と共にやゝ痿えて居る。

目次

序文

秋風帖

御祭の香	三
山から海へ	一〇
武器か護符か	一三
出来合の文明	一六

野の火山の雲……………一九

御恩制度……………二五

狼去狸來……………二六

巢山越え……………三三

屋根の話……………三四

ポンの行方……………三七

馬の仕合吉……………四〇

杉平と松平……………四三

還らざりし人……………五〇

プシユマンまで……………五七

茂れ松山……………六〇

秋の山のスケッチ……………六三

向小多良……………六七

木曾より五箇山へ……………七三

佐渡一巡記……………七五

佐渡の海府……………八三

熊野路の現状……………八九

峠に關する二三の考察……………九四

秋

風

帖

御祭の香



高田の町の祭禮は、面白いは人が雉や山鳥など、同じく、男ばかり極彩色の衣裳で花や
 かに歌つてあるき、女は温仰の目を揚げて之を見守つて居る。異性の間には嫉の争ひと云ふも
 のが、全く無いから思ふ程である。或はじみな木綿縞の袖口 突出した、賤の女とも謂ふべき
 婦人が、路傍にイんて頻りと何か言つて居るから、そつと近づいて聽いて見ると、それは前を
 通る踊の唄に合唱して居るのであつた。此様な單純な耳の人が住んで居る土地である。平和な
 らざるを得ないでは無いか。

御大禮の時でもさうであつたが、あまり熱中して支度をする爲に、當日が待ち兼ねるものと見えて、宵宮の前の晩からもう十二分の豊の明りをして、肝心の神輿渡りの日には既に些しく樂み疲れに疲れて居る。紅紫の羽二重の襦袢が、汗ばんで塵を招いて居る。大名行列の小さな武士は、馬の上で眠りかけ、又はだゞをこねて附添ひの親たちを困らせて居る。揃への扇のあどけない踊子が、折々懐から柿などを取出し、白粉の口の端を汚しながら、跟いて行くのも是非が無いと思はれた。

それに又歡樂も今日ばかりと云ふ淋しさも萌して居る。次の四年目には世の中も變るであらう。ましてや遠國から來合せた者などには、無邊際に只一度の遭遇だ。何でもよく見て置かうと思つて、群衆と一團になつて動いて行くと、是が目まぐるしいと謂ふものであらうか、世界が只虹のやうに茫漠と美しいだけで、音聲にも茲を視よと誘ふほどの、強い中心と云ふものが無かつた。獨り不思議なことには平生最も謙遜で且稍幽鬱なる鼻ばかりが、無暗に働いて色々の事を考へさせてくれる。實に意外なる體驗であつた。

我々平民は固より生れながらの詩人では無い。大まかな同情者が高尚と評してくれさうな今日のやうな感想でも、仔細に分析して見ればやはり物質的の基礎の上に立つて居る。此町に入込む程の者が、均しく感受する快よい恍惚は、則ちこの常と異なる「人いきれ」の致す所である。言はゞ我々の鼻に訴へる土埃の音楽である。香の一種である。氣を附けて見ると、なつかしい昔風のメロディが、その新しい調子の中に籠められて居る。

古人の頬にも觸れたに相異無い舊の五月の日影である。其が一旦人々の胸を通つて來て、此市街を暖めんとして居る。最も生活に親しみの深い色々の物の香が、之に由つて運ばれるのである。中でも植物なら花に該當する部分が甲が高い。所謂殿方用白粉も今日は盛に消費せられて居る。現代文明の力が喚覺した地下の石炭の精が、香料と爲つて其中に現れて出る。次には髪の毛であるが、是も昔の若者等が久しく味ふを得なかつた尊さにまで達して居る。おきさ次郎兵衛の淨瑠璃にも「あくれば匂ふ梅花の薫り、闇にもしるき云々」とあつて、心中する程の大阪の女で無ければ、附けることも出来なかつたものを世の中が進めば、此邊では殆ど一人殘

らずに使用して、且歡樂の熱を以て之を溶して居る。其香が何の爲に我々の祭禮の基調を作るのかは、民を愛する神々ならば勿論知り切つてござるであらう。足穂たりのの田に溢れる如く、人草は里に茂らねばならぬからである。

之に反して百年前の秋祭に、啾唳たる響を發して居たもので、今や漸く幽かなのは麁を迸り出る新酒の香であつた。赤い樽を離れ白い徳利に近づく時勢に爲つてから、酒はみだらな者が弄び、眞摯な者の怖れ又は税を掛ける品と變化した。確かに斯邦の神の道では無い。二階で獨り飲むやうな惡風習は改めて、今一度之を御祭の日の合奏に、加へて見たいものである。かう云ふ淋しいことも考へさせられた。

下

煙草を酒と對立させるのも洋風であるが、島田の祭では驚くほど此煙の香が高くて、嗅ぎ過

すことが出来なかつた。我々に脱帽を命じた神輿の世話方も脚へて居た。踊屋臺の上も下も、女に入交つた若者は殊にバット敷島を愛して居た。僧侶に抹香が伴ふやうな、一種の流行と思はれたが、其祭の空氣を作るに至つては感心しなかつた。自分は先頃奥州野邊地ののささ踊で、數名の青年の巻煙草を憎いと思つた。田名部たなべの寺でもあまり盆踊の脚へ煙草が甚だしいので、終に境内で踊ることを斷られたと云ふ話を聞いた。祭や踊を農村の娛樂などゝ名づける人々が恐らくは斯様な變な流行に就いて、責任の大半を分たねばならぬのであらう。

白粉鬢附のロマンチックに對立して、最も古典的なのはやはり食物の香であつた。何人も熟知した種々の昔の、如何にも微妙なる配合である。なつかしい音色ねいろである。其は獨り人間の故郷たる、豊かなる土から發生した爲ばかりでは無い。遠き祖先が餓ゑ疲れる度毎に、必ず思ひ出した林や磯の幸福を、語るが爲と云ふだけでも無い。町の生活に最初から必要であつた統一と調和が、今では祭禮などの日で無ければ、容易に我々の心を動かす迄に現れて來ぬからである。硝子戸の文明は臺所の隔絶を意味するが、大昔に在つては一團の部落は、即ち一箇の庖厨

であつた。民の竈の喜びは時として高き屋にも達した。甲の家で松茸を煮る夕は、直に又乙丙丁の爐側でも、之を味はふ時であつたのに、次第に力の及ばぬ者が多くなり、殆ど一塊の森や竹藪で包まれた里にして、やれ何作では鬮を焼くよと、羨まれ評判せらるゝに至つて、乃ち板戸ついで立の沙汰が始まつたのである。祭は何と言つても復古の事業に相異無い。此日ばかりは鮓でも甘酒でも粟の餅でも、人の製する品を我も作るから遠慮が無い。其爲の門戸開放でもあるまいが、戸は引揚げ暖簾ははづし、掃き淨めた土間を透して、紅く勝手元の火が燃え、物の香は子供よりも自由自在に隣近所を出入りする。通り掛つた遠國の者が、深い旅愁を感じるのも正しく此刻限である。

御互に笑はれるのを恐れて何も言はぬが、子供の時の食慾ほど、郷里を慕はしめるものは實は無いのだ。さうだ此句ひもよく記憶して居る。河の神の夏祭の夜などに、廣い草原に一輪の大きな花の如く、塵と人影とが提灯の火に照されて居る部分がある。胸を躍らせて其中に紛れ込むと、煮詰つて行く煮込のおでん、踏潰された果實や瓜、其他色々の香が群衆に暖められて

流れて居た。強ひて求めたら地方と時代との特色もあらうが、鹽と五穀の主たる種は一つで、冬の境に一度は遊べと云ふ、神意を共に受けた我々である以上は、此音楽も亦國歌の一である。此次の四年目にも上品に演奏してもらひたい。舞臺に立つ藝人のやうで無く、親や女房子と共に楽しんだ昔の日本人のやうに。(駿州島田にて)

山から海へ

三十年前に測圖をした陸軍の五萬分一は、焼津やいづの見物には殆ど役に立たなかつた。當時一筋半の濱の町は、後の田を埋めて四筋の餘に爲り、まだ隣村の地に食出はみだして居る。舊焼津の面影も判らぬ程、在來の人家も變つて居る。濱へ出て見れば防波堤は勿論、海が運んだ只の石までも新しい。濱の松にも老木は少い。あの尙古派のラフカチオ・ハーンが、どうして此浦を愛し續けたかを訝るばかりである。

ハーン氏も既に歴史に爲つたが、龜井知事も故人に爲りやうが早かつた。元氣な龜井さんも焼津だけで發動機の漁船が、もう百五十艘にも爲ると聞いたら驚くだらう。勿論元は荒海の危険を凌ぐ爲の發案であつたらうが、安全帯が擴張すれば又その外へ乗出し、さうして常に危険

を冒して居る。剩るから人命を粗末にするので無い證據は、焼津でも絶えず人を招いて居る。眼に見えぬ促迫そまほくが此世には有るのである。

宮城岩手の海岸の村々では、焼津の鯉節商だと謂ふ青年によく逢つた。賣りに來たかと思ふとさうでは無く、此邊から半製品を買集めて、焼津で仕上げをして出すのであつた。何でも相應な産出のある土地と聞いて居るのに、更に九州からも奥からも、生節をうんと仕込んで行くとは、よく／＼人の手の剩つて困る爲だらうと、想像して見ると事實は寧ろ其反對で、剩つて居るのはやはり資本と所謂企業熱とだけだつた。

鈴木町長の話に依ると、最初は他郡の漁村から、多くの若者が發動機船の練習に來たのを、聲に取つたり嫁を遣つたり、其他色々の人情の羈かりなで繋ぎ留めて、成るべく此湊の船に働かせるやうにしたが、後には相手にも注文が出來て稽古濟み次第に多くは還つてしまふさうである。それで近頃は力めて山村の青年を招くやうにして居る。成程是ならば還つてもしやうが無いから留まるであらう。船頭が多くて船を山へと云ふ諺があるが、人の方はさう自由にもなるまい。

折角思ひ切つて出て来た若い衆を、再び寒い山奥へ稗を食べに戻さぬやうにしたいものだ。

山が平穩なる隠れ里であつた時代は、實は我々に取つてはあまりに長かつた。最初船で渡つて来た此國民が、流に逆うて高地に入込んだのは、自然の趨勢と云ふことは出来ぬ。前には即ち戦亂の威嚇が有り、近世は又人口増加の壓迫が有つた。羚羊かもしやの躍るやうな山腹に麥を播く程にせぬと、この狭い島に六千萬の生靈を盛ることが出来なかつたのである。海が廣漠の未開地であることを心付けば、彼等の下りて来るのは所謂水の低きに就くやうなもので是程成功し易い獎勵は無いのである。其代りに人間の流れにもちやんと水筋を付けて、安全な出口を指示して貰はぬと困る。此責任は誰か負うて居る人が有るだらうか。(駿州燒津にて)

武器か護符か

新進氣鋭の濱松の市でも、稀にはちと古臭い社會事業を遣るらしいことを、少なくとも新聞は報じて居る。何でもつひ此頃の話である。口に離れた職工たちを國に還す爲、町の有力者が旅費の金を、慈善家から集めて居ると云ふ噂である。旅費も無いやうな貧乏な家族に、還つて来たぞやれ樂たのしみやと云ふやうな、結構な故郷が有らうとは一寸信ぜられぬ。送還は果して彼等の救濟であるや否や。或はそんな事をして只問題を片付けて置くのでは無いか。

東京でも路に倒れた行旅病人を前に置いて、虞芮の争ひをした警察署が有つたさうだ。無暗な謙遜は常に事務の延滞であるのみならず、時としては餘分の混亂を近隣に強ひることに爲る。今に全國で一齊に此政策を採用する時の事を考へると、實にぞつととしてしまふ。

一時の成功から申せば、濱松などで右の旅費の施しをするほど、簡便有效なる救済事業は他に類が有るまい。何となれば遠方から遣つて來た労働者は、此附近の工場にはまだ幾らも無いからである。従つて其だけ近所迷惑も大きく無いかも知れぬ。併し同時に他郡他縣から、さうして戻された者の始末を考へて置く必要が有るから、問題は決して簡單では無いのである。其上に之と關聯して、元から町に住み又は近在から出入りする職工とても、單に歸宅を見届けて安堵する譯には行かぬ。何しろ區域が廣く無いから、是だけは多量に辨ずとも言はれぬやうである。

職業紹介所はまだ一向閑ださうである。てんから口が無いのだから、其は意外でも何でもない。頼みに來ぬから困らぬのだらうと、斷定し難い事由が何分にも多い。馬鹿げたやうな話だが、首になつたことを近所に隠す爲に、用もないのに辨當を持つて、毎日出歩いて居る男もあつたさうだ。多くの家庭では稍其に近い忍耐をして居るに相違無い。どうにも成らぬのは成らぬとして、旅費の一件だけはあまり氣樂だと思ふ。

自殺自決が責任を解除するやうな國柄ではあるが、今度の悲況などは重役の更迭、乃至は會社の解散を以て一切の終りとするやうな小問題でない。勿論行政官を鞭撻さへすれば、何とかしてくれる筈と思ふのは誤りなる如く、若干の有力者が手も足も出ぬからとて、之を責めるのは不當である。平生立派な口を利いてゐるからと言ふなら、寧ろ平生利かせて置いた方が悪いのだ。單に此地方に對して説くのではないが、世の有力者たる者は深く我が無力を覺り、捨て置き難い偉大な問題が捨て置かれた今度の悲しい經驗を忘れないで、權能は有つても智慧の無い者には縋り附かず、此次は解決し得さうな者を働かせる工夫することだ。愚直で昔風な職工が得られて、好い按配だと思ふ如き鼻元思案は、未來の工業市としては第一に撤回せねばなるまい。(遠州濱松)

出來合の文明

同宿の一人が、宿帳に興味を持つて頻りに翻すのを側から見てみると、不思議なことが見付かつた。購買材木商雜貨の注文取等の、遠方の旅客の中にまちつて、附近の村々の、職業は農と記した人が大分來て泊つてゐる。郡會議員や役場員なら、公用で無くても所謂肩書を書く習ひだから、疑ひも無く是は其以外である。此邊でも景氣の良い時節には、自轉車などで町へ泊りに來る人が、やはり多いらしいのである。

武藏野の奥にも此の類の町は多い。大抵は月に六度の市が立つてゐる。餘り平穩なる山中に住む者が、時に浮世を見に出て來る場所である。實際山々の口元に、若し二俣の如き町が無かつたら、新時代は永く此人々の爲に、蓬萊の夢であつたかも知れぬ。幸ひにして祖父以前に、

植ゑて置いた美しい杉檜が有つて、之を伐つて筏を組むならば、足弱ながら平地の商人が、此あたりまでは買ひに來る。彼等が門の戸は徐ろに叩かれるのである。曾ては谷川の水ばかりが流れ下るものであつた山の奥から、一籠の果實一駄の炭までが町あるが爲に爰に集まることになつたのだ。

其對價として彼等の求むる物は、固より新しい幸福で有つた筈だが、たゞ其幸福の目安が、毎に簡単に失してゐた。例へば山の中に居て暖を愛する故に、母や子の爲に綿を買ひ木綿を欲するはよいが、酒の酔をも暖いから結構なものと熱心に求める傾きがあつた。市と酒とは殆ど斷つべからざる關係が有る。さうで無くても亭主の方が外出の序が多いのに、斯う云ふ獨善主義の商品が市に在つて、折々は陶然として歌つて還るが爲に、用を作つて出て行かれるやうでは、普通の貞淑では辛抱がしにくい女もあらう。

自分が試みに見てあるいた町の様子では、婦人が立止つて覗きたがるやうな店は甚だ少かつた。又小兒の爲に發するかと思ふ音響や色彩も乏しかつた。強いて我慢をすれば附合へると云

ふだけで、要するに山の町は父老の爲に出来てゐる。永く斯うでは居られまいと感ぜられた。淋しい山の在所は實は元からの在所ではない。田屋と名づけて一種の労働場であつたのを、往復の面倒と亂世の不安と、後には里にも人が溢れた爲に、老幼を携へて當分移り住んだだけで日本人は邑むらに集つて住むのが本性である。折角の天下太平に際會して、假にもう田屋を引揚げて來ることは難いにしても、せめては家内一同で同じ程度に邑居の幸福を分つやうに心がけぬならば、即ち是れ武陵桃源の牢屋である。全體に山村は人が好いばかりで、今までは少し注文が無さ過ぎた。殆ど宛がひ扶持のやうな世間の餘り物を打込まれて、是が文明かと味はつてゐた嫌ひが有る。町を利用する態度一つでは、今よりも數倍上品で、且寢心地のよい家も出來ように。(遠州二侯)

野の火・山の雲

上

天龍の渡場で、小豆色に塗つた豆自動車にすれちがつた。村の商人の賣物であるが、賣れないので困つて居るさうだ。選舉の時にはずつと上流の熊くままで大きなやつが來た。荷馬車に出逢つては路が狭くて換れぬので、夜來て夜戻つたといふ話である。其れでも縣道が開けた御蔭にこんな化物が奥在所にも現れる。人馬の脊だけでは澤山の文明は持込まれなかつたのである。併し村の人たちは頓と之を歓迎するやうにも見えぬ。何年にもなるが少々の飲食店などの外には、新道の路傍に家を遷した者も無く、依然として一軒づゝ各異つたる平面に住んで居る。

稀に石垣が長く続き、二尺以上脊競べをして居るのは舊道である。舊道の方が三分の一も低いから、徒歩の人は之を通るが、其代りには膝に手を添へるやうな坂ばかり登らねばならぬ。嶺には必ず僅な平地があり、人家が有る。越えて向ふへ下ることを、此邊では「ひつくりかへる」と謂ふ。脊戸から直にひつくり返るやうな處にも、寒いであらうに古さうな農家が住んで居る。自分を案内してくれた二年生の兒童は、何れもそんな家の子であつた。

足跡で踏開いた路だけに、如何にも自然に附いて居る。水分れに立つて見ると、何れか一方の谷は必ず見通すやうになつて居る。其展望を幾らか遮るやうな突出は、多くは昔の微細なる戰場、乃至は砦物見の跡らしい。今は引替へて電信の柱などが此に立つて居る。渡り鳥が野に下るにも、便宜の多さうな路筋である。

學校の子供は随分遠くから通ふが、尙どうしても分教場を置かねばならぬ部落が二つある。阿寺と云ふ區は名を聞いても寒さうだが、之と反對の西の端には、懷山の一字が山を負ふて遙に散布して居る。往つては見ぬが其中の數戸は、家の後をひつくりかへれば直に引佐郡の澁川

へ下つて行き、表口はまともに曳馬の野を見下すやうな處に立つて居る。いつの昔から斯うして住んで居るか知らぬが、山は元の儘でも野にはえらい進歩があつた。「にほふはり原」と歌に詠まれた叢を分けて、芋掘り長者が著積ばかり掘つて居た時代には、夜は固より眞暗な曠野であつたらうのに、一つ二つと燈火の數が増すと共に、畠あり村ある明るい田舎になり始めた。人は死ぬから一時を古今と思つたかも知らぬが、最近の變化に至つてはまのあたりである。濱松の松は既に残り少なで、その代りに出來たのは織物の工場である。一機に一燈の電燈がついて居る。それが鐵道を越えて北は笠井の附近、更に二俣の對岸近くまで、只の農家でも二棟三棟の、長い織場を建てた屋敷が稀では無い。北を向けて明り採りに、屋根の片側を硝子にして居る。何とも無い山の上の農家に於て、靜かな夕方に見て居ると、一時にはつと美しい光が、廣い平野を彩るのを見るやうに、もう世の中がなつたのである。

西武藏の或山村からは、我東京の町の火も、亦此の如く眺められて居る。しかも只茫洋たる光の海であつて、晝の間は緑の海に代り、更に目に見えぬ人の海の、幻を誘ふに止まつて居る。之を取繞らす武藏野原は、即ちその海の淋しい渚である。常は一樣の樹立塵煙だが、夜に入ると處々の村が露はれる。真正面に進んで来る汽車のランプの、暫くは動くとも見えないのを、今立川の橋にかゝるなど、見馴れた村の人だけは手に取るやう地理を知つてゐる。流れや古木の目標に由つて、恐らくは一々の灯火の主を指點することが出来るのであらう。況んや子を遣つて置く母などの眼には、屢々其光が横に長く、霞みまたゞき又は濡れて映つて居るに違ひ無い、雲に鎖された夕方でも、一つだけは其方角に見えたのかも知れぬ。

濱松で補習學校を始めてゐる中村君の工場にも、阿多古の山から幾人かの少年が下りて來てゐる。もう其郷里では多分の次三男を、分家させるだけの耕地が無いからである。此學校が終つてから、還るか止まるか又は他に行くかは、家の者にも我々にも、等しく大きな問題である。

當人等は却て一番呑氣かも知れぬが、親たちとても思案に暮れたと云ふ風でも無い。序がある。と寄宿舎を訪ねて來て、泊つて行くこともあるさうである。常に促迫と云ふ味を知らぬ人々だ。次の日には工場に坐つて半日以上、機械の動くのを見て居る者も多いと謂ふ。彼岸の前後などには、鴨江の觀音さまに御詣りに來た姉や叔母が、子供の顔を見に一寸寄ることもある。家へ戻つての物語は多からうが、男ばかりのごたくとした中なので、多くは何の話もせずに行くさうである。碌に修繕もせぬやうだが軌道はやはり輕便なもので、山と町とを半分の距離にした。さうして燈の光も通ふのである。只市中では電燈の数が繁くなつて、とても村里のやうに一人々々の消息を傳へるわけには行かぬ。廣漠たる人の海に向つて、扁舟は將に其纜を解かんとして居るのである。

中村君は又、よく霽れた午後などに、みんなを引連れて二階の北の窓を開き、君等の村の山が見えるかと、聞いて見たりすることがある。山には裏と表とで、峯の形の丸きり違つて居るものが多いが、其でも感覺は至つて精巧な磁石である。或は又間違つた方角に向つて、心中の

郷里を描く者もあるだらう。白い小さな雲が動いて居たりすると、直に以前の似た天氣の日を思ひ出すか、あゝ斯んな日にもやを刈りに行きたいなど、言つた子供もあるさうだ。併しもやを刈るのもさう軽い労働で無い。こんな日に山に登つて獨りで刈つてゐたら、又里が見え汽車が見え、海から風が吹いて、夕方には戸に凭れて下の灯を眺めるやうなアルネのやうな氣持になつたかも知れぬ。(遠州上阿多古)

御恩制度

小さな母校の庭で、今はちようど消防の演習がある。部長は二十七八のいゝ男だ。志願兵の少尉でもあるかと思ふと、なに只の旦那衆ださうな。今の時節に人を手足の如く動かすのは決して容易な技術では無い。又此邊の人士が來るべき利益を計算して、従順を装ふ程鋭く無いことも明かだ。おまけに消防は殆ど全部が義勇軍である。之を率ゐるのは所謂徳望に相違ない。さうして平和な村の徳望は世襲であるやうだ。

自分の知る限りでは、今朝出て來た遠州の熊村くまむらの如きは、先づ一流の平和地である。百五十内外の戸數が、中央のたひらに住んで居るが、其中の百二十何戸は元からの村人で無い。しかも近年の景氣で引寄せられたので無い證據には、移住者には二代目もあれば三代目もある。即

ち時勢と共に、遁げて來たりまごついて居た者の、事情も亦一樣で無かつたので、其を此村ではいつの世にも親切に世話したのだ。最初は多分どこの仁が、どうして爰へ來たかの好奇心が口を開いたのであらうが、まあ働いて見よが久しからずして、どうやら正直さうなと云ふことになり、信任せられる方では居心地が好く、打明け話をして無理な縁を纏めてもらひ、又は其御面倒を掛けるまでも無く、既に近所の娘と内談をすませたりする。子でも出來ればもう尻が据つたものと看做される。あの畠の半分を屋敷にせよとか、乃至は此山に杉を植ゑさせるといふことになつて、其金は大抵十年間一割の利子拂ひで、すんだことにして貰つて居る。山一つ彼方の「報徳」では別に一年分の禮金が添ふさうだが、此邊ではそんな勘定をする人なら、いつ返すとも知れぬ者に、鍋釜を貸すやうな世話は始めからせず、又そんな冷淡な態度で、旦那様と呼ばれて居る人は一人も無いさうである。世話を受けた者が言ふのだから、此は本當であらうと思ふ。

此連中は吉凶の折は勿論、年に一度の刈入れ麥こなしにも、顔を出すのを義理として居るが之に對しては食物なり衣類なり、相應以上に氣を付けて遣るのが、大家の夫人の常の習ひで、結局は村の門閥の品格地位は、高い入費を以て平素から維持せられて居るのである。金はいくらでも出すと謂ふ新長者の威張方とは種がちがつて、是には歴史上の根柢がある。

只悪い事で無いだけに、世の中が變るとなると始末に骨が折れる。早い話が普通選挙が始まつても、斯ういふ村では結果は丸で元の通りである。五名か七名の顔役の、在來の力さへ把へて置けば、依然として情實候補者を當選させることが出来る。我々の感銘の美德が公認されて居る間は、例の温情主義も嘲笑することが出来ない。賄賂を嚴罰に處する程の官憲ですら、あの人の意見には假令非が有つても反對し得ない義理が有るなど、麥刈の手傳にでも行く氣になつて居る國柄だから。

狼去狸來

舞木峠は近年まで立派な杉林であつた。空も見えぬほど茂つた山路であつたが、しかも今日のやうに淋しいことはなかつた。秋の末に村々から出て道を修覆すると、其から後は雨もあまり降らず、草も生えぬ故に通行は樂で、舊正月などは秋葉道者の話聲の絶間が無い位であつた。頂上には熊くまから夫婦者が毎日來て茶店を出し、渡世する世中であつた。其が袋井から輕便が森町に通じて、殆ど此路は不用になつた。參州から嫁に來た人が年を取つて、人力で實家へ行きたいと言つたが、三人曳でも四人曳でももう通れなかつた。

さうなると晝間でも一人では氣持がよくない。時々女が追掛けられた話もあつたが、其すら最早言はぬやうになつた。なに淋しいと謂つた所が、出る物はきまつて居る。山の犬は斯う

木を伐つては此邊には居らぬ。狸などは高の知れたものだ。山の犬は姿を隠すからをつかないが、狸は提灯の前へちよろ／＼とあるくこともあつて、悪戯と言つても化の皮がすぐ露れる。でも馴れないと馬鹿にされる。一人で通ると後から呼ぶことがある。振向いて誰も居らぬと急に怖くなるが、尻聲が切れてほいほいと短いのは狐だから、立止つたり返事をしたりせぬがよ

う。
全體に狸は他の獸よりも、色々な聲をまねるのが巧なやうだ。狸の神樂などは此邊の人で、一度や二度聞かぬ者が無い位だ。殊によく聞く草つ原が、此時の路にも有る。つひ四五間の鼻先で、笛なら太鼓なら本物と寸分ちがはず、がや／＼と笑ひながら囃す様子まで、目を潰つぶつて居れば彼の所爲とは思はれぬ。又彼とは知りつゝも、感心せずには居られない。此などは全く騙すのでもなく悪戯でも無く、自分が面白くて遣るのでなければ、恐らく我々をして敬服せしめんが爲だらう。狐の嫁入よりも今一段と社交的である。

悪戯も或は人なつかしのすさびかも知れぬ。熊村で自分の新たに知つた細君などは、つい半

月ほども前に、四人の同志と共に後の山に登り、盛に薪をしばつて居ると、急に役場の脇の半鐘がけたましく鳴り出した。五人が五人共に正に其音を聞いたのである。是は大變と色々としてそこらの高見から、里の方角を見ても煙らしいものは見えぬ。事に由ると狸かも知れないとよく心を落付けて兎に角戻つて來ると、在所は極端に平穩な午後二時の茶漬時であつた。何で此様につまらぬ悪さをしたかは別問題として、狸が半鐘の眞似も上手なことだけは争はれぬ。秋葉の奥の山が山の御犬の領國であることは、自分も之を認める。しかも此神も既に威武のみを以て君臨して居るのでは無い。天然の神の力にも限りがある。然るに人間の物を信ぜんとする力には限りが無い。此次には何が舞木の杉山を支配するであらうか。

巢山越え

遠江と三河とを繋ぐ此峠を、秋葉路と謂ふかはた鳳來寺路と呼んで居るかは、來て見るまでは自分には推測が出来なかつた。が、兎も角も二州の二大尊の間に、通路を求めんとすれば即ち是で、而も夙に信仰以前から存在したらしい山路である。曾ては鳳來山參詣の爲に用ゐられた時代も有つたのであらうが、近頃では正しく秋葉路であつた。今日は最早やそれでも無い。鷲巢とびのすと云ふ邊が一ばん高く、大きな四五本の赤松の間から、引佐郡の山が殆ど皆見える。鎖くわ玉たまの一村は眼の下である。鷲のやうな平凡な鳥でも、いつも險阻の巖壁の上に巢をくふから、目標とも爲り地名とも爲る。鳥の及ばざる點である。其から僅かばかり山の脊を行くと、縣境であるらしいが榜示の杭は無い。谷を隔て、三河八名郡の浅川部落がある。山田の忙しい時だ

のにさつぱりと庭を掃いて、一戸も貧乏らしい家は無い。三里以内に醫者は居らぬさうだが、水と日當りとは極上らしい。すつと下ると字六本松の民家は道の傍で、水車などが廻つて居る。村を出ると紅葉の山に囲まれて、美しい小沼があり、其端には板橋が架つて居る。冬は往來の人がなぐさみに、氷滑りをして行つたものと謂ふ。

沼が隠れてから僅の間は野路で、も一つ曲れば巢山の村である。廣々とよく稔つた田が有る爲に、平地に出たやうな感じがするが、四十八曲りの險を降るに及んで、始めて二階の上であつたことを覺るのだ。三州には巢山と云ふ山村が幾つかある。鷹を捕りに來る人達が心づいて拓いたか、捕らせる爲に特に村を設けたか。又何人が之を命名したか。今と爲つては何も分らない。今の道は兎に角毎年の秋葉参りが附けたと謂つてよい。斯んな山村でも宿屋が二軒あつた。突當りの吉田屋は材木でも片商賣にするらしく、家は農作に適するやうに出來て居る。旅客のみを待受けても居られぬ筈である。今一軒は朝鮮へ引越して往つた。立派な石垣の屋敷に桑が栽ゑてある。一晚に三百人も泊りが有つて、家の者は土間に夏の涼臺を持込み、其上に

寝ることも珍らしくは無かつたが、もう夢のやうだと土地の人が言つて居る。

四十八曲りは巢山の方からは殆ど平路である。荷馬車を通すと言つて、之をSの字を押潰したやうな七曲り位に改修して、元の通路は處々毀れたが、それでも婆様までが新道は通らず、前の前の百何十曲りかを真直に、姥が瀧と爲つて下つて行く。下つてしまへば細川の村だ。飽きるやうな長い在所だと謂つたが長いだけが事實で、山を後に流れを前にし、昔風の屋敷がよく發達して居るのが、とり／＼に面白い。岡を越えると大野の町である。崖が高く下を行く三輪川の水は見えぬ。長篠の古城址は此深い谷川を隔て、居る。さうして爰にも又一つの鳶巢山がある。

屋根の話

一九の膝栗毛を輪講する會が出来、其が感謝せられる時代に爲つた。廣重の五十三次などももう史料である。此寫實の繪が繪空事かと思はれる程、東海道は別な物に爲つて了つた。獨り鐵道と煉瓦とペイントとが之を致したのでは無い。眼を遙に平穩なる場面に放つて見ても、昔ながらの紅い夕日、蒼い殘月の光を隈どる輪廓が、最早四分の一だけでも舊日本では無くなつた。人の頭から丁髷が引退した如く、家の屋根からは栗檜の粉板まきいたが影を斂めた。菅笠や頬冠りが安い帽子に改まつたやうに、田舎と聞けば目に浮んだ草屋が、僅な間に悉く瓦葺に爲りきらうとして居る。其には又十分な理由が有つて、惜しいと思へばどうか残し得るものでは無いやうだ。世には何が何でも變化せねばならぬものが、此通り有るのである。

濱名湖以東には元は板葺が多かつた。或時代には之を以て驛路の美觀と考へ、都から移した文明の一つに算へたこともあつたらしいが、民家が密集して愈々火事が怖くなれば、繪巻物以來のなつかしい板屋でも、罷めて瓦にせねばならなかつた。隣國の三州は有名な瓦の産地である。制度の禁止さへ解けたら、其のみでも之に向ふべき自然の勢であつた上に、右申すやうな火の用心と、木材の騰貴が手傳つて、終に柁大工は衰へ瓦師が大いに興ることになつたのである。徒らに昔の趣味にさへ捕はれずば、見た處は此方がずつと好い。きちんとした瓦葺に電燈でも引いて、小工業の機の音でもすれば、農村の進歩も是までといふ感じがする。唯人があんまり幸福に成つて居らぬのに、當惑をすればかりである。

曾ては農民の無細工な茅葺も、一旦は立派な藝術にまで進んで居た。併し残念ながらも永くは續くまい。寺や社の一生懸命の普請にすら、萱を集める爲にどれ程の苦勞をするか。只の民家で言ふならば、二十年一度の屋根替の用に、空しく十九年の萱野を立て、置くことは不可能だ。是に於てか「ゆひ」の組織が有つて、二十戸の家が順々に一戸づゝ葺替へた。其共同の野



も畠に拓き木を栽ゑ、瓦に爲つた家から追々に「ゆひ」を脱する。一人の物好きが静かな雨の音を聴かうとすると、殆ど有る限の無理をして、草と職工とを遠方から喚ばねばならぬ。やがて冬の稼の山國の屋根屋も、廻つて來ぬことにならうと思ふ。

稻藁麥稈は三年も持たぬが、其でも手近の材料だから之を交へて使つて居る。しかも此とも手間融通の慣行の存する間で、飯食の入費が高くなると、やはり贅澤な工事になる。作手つくての山村の如きは萱を立て、置く原野はなほ多いが、新たに作る家で之を利用せんとする者は殆ど無い。よい時に見に來たとつく／＼我々は思つた。爰ばかりが別天地で居ることの出來ない世の中にもう爲つた。赤い瓦を焼く工場が、此村だけでも三つある。五年の後には村が緒なくなつて居るだらう。

ポンの行方

海拔千五百尺の高寒な此村にも、ポンの往來する大道は幾筋か通つて居ると見える。どの山あひを越えるのか、途で遭つたと云ふ人も聞かぬが、今まで一年として來なかつた年も無く、いつの間にかちやんと來て小屋を掛け、つゞましく煙を揚げて居る。部落から稍離れた山の蔭の、樹林を隔て、水の靜かに流れる岸などが、此徒の好んで住む地點である。或は往還から下手の日當りに、子供まぢりの人聲を聞くことがある。普通の里人なら必ず顔を出して此方を見るが、足音を止めると話聲を絶ち、物色しようとするれば愈々ひつそと爲るのはボンである。

馴れたら斯うも爲るものか。村の人は年々來る彼等を、軒の燕ほども注意して居らぬ。同じのが來るかどうかを尋ねても、確かな返答は得られない。男は朝から川に入つて居て顔を丸き

り見せぬ。捕つた物を賣りに来るのは大抵子持の女だが、どうも一つ顔だつたやうに思ふとある。此程度の交通だから、ボンも安氣に住めるのである。竹籠の類も作つて持つて出るが、主たる渡世は川漁で、中にも龜類はよく捕る。我々には想像も付かぬ小流れから、ちやんと龜の穴を見出して、居ればきつと捉へる。ボン又はボンスケの名も多分は鼈から出た我々の命名であらう。ヲゲと謂ふのも川魚漁具の名が元らしい。警察官はサンカ、又は箕直みなほなども呼んで居るのである。

引揚げ前にはこそくを働くから、警察では注意すると謂ふが、恐らくは盗難の無い限りは注意せられて居らぬのであらう。來れば一世帯づゝで、群を爲すと云ふまでとは昔から無かつたが、近年數の減じたのも事實だらう。其は田舎の渡世が段々むつかしくなり、之に反して大都會には紛れて住み易いからである。ボンから見れば離散背叛、我々から言へば半分の歸化が多くなりさうな道理である。遣つて來る季節もある筈だが、それ程よく視察した人も無い。寒くなれば濱手へ下る都合から言ふと、此邊には秋の末の今頃來て居ることと思ふ。我々が斯ん

なことを話して居るのを、何處かで聞いて居るのかも知れぬ。又寒中に五十錢遣つたら、乳まで水に入つて鯉を捕つてくれた。序に料理もしてくれただが下手だつたと云ふ話も聞いた。然らば冬でも此邊には居ることが有るのである。

不思議なことには國勢調査の時に、氣を付けて見たがどの部落にも、ボンは一世帯も居なかつたと謂つた人が有る。自分は之を怪しまなかつたが興味は感じた。日本の幽冥道の思想と同じく、ボンは此國土の第二の住民である。大團體とは共通せぬ利害を持つ者である。計算の外である。物靜かな京都人が全部踊つたやうな祭の日にも、私は若王子山の松林に、細い煙を擧げて居る者の有るのを見た。即ち齊明天皇紀にある朝倉山の鬼であつて、少しばかりはどうも仕方が無い。我々は久しい間之を大目に見て來たのである。事によると彼等の中の小賢しい奴は、道の辻々の赤い立派な掲示を見て、仲間の者に斯う謂つたかも知れぬ。注意せよ十月一日を、此調査に洩れなかつたらボンの耻ですと。(三州作手村)

馬の仕合吉

此邊の人は見塚も無くすべて馬頭觀音様と謂つて居るが、馬の神の石像にも實に色々の種類がある。十一面の省略かと思ふ三面の佛さまにも、庚申さまに相違無いのにも、大日如來にも地藏菩薩にも、共通に頭の眞中に梔子の實によく似た馬の首が附いて居る。岡崎の石屋に馬頭觀音をと注文すると、時に由つて様々のを届けて來るのださうである。其がやはり流行でも有るものか、近頃造營の石のまだ白い分は、概して眼のくりくりとした口の脇の下つた意地の惡さうな青面金剛である。現に今君が寫眞に撮つた、二尺あまりの石の厨子に安置した馬頭もそれで、直立した髪の毛を黒く彩色して、丸で加藤清正の甲の如く、其前立の處に例の耳の尖つた馬の首がある。大正八年正月とあつた。ちつとも觀音様ぢや無いねと言つても、さうでしよ

うかと謂つた程の佛教の知識である。

それで又何故に、斯んな澤山の石體かと謂ふと、人は何處までも無意味な事はせぬものだ。馬ほどの大きな物が、今まで何とも無くて卒然として斃れて死ぬ。驚き又怖れざるを得なかつたのである。乃ち其不安を安めんが爲に、成るべく古くして有難さうな手続きを履んで置くと後日暮方などに獨で其處を通つても、胸騒ぎがするやうな患ひは無い。此も菩提の縁なりと僧たちは謂ふか知らぬが、全くは此面倒も身勝手な人間の爲で、動物虐待防止會の側から言へば遺る恨の古戰場に他ならぬ。其ほど又數多い馬が、今尙路の畔で勞苦の央に命を終つて居るのである。

西津輕の旅の馬追から聞いた。馬は大事に飼へば二十五歳までは生き、生きて居る間は役に立ち牝馬なら仔を産む。併し仔を持てば弱るから成るだけ種を附けぬ。殊に年老いてから牡馬を産むと、十が十まで母は死ぬさうである。駒を賣放すと三日四日は親馬が悲しむ。空しき厩に戻つて嘶く聲が痛ましい。併し一週間も過ぎると忘れらしい。之に反して食物を與へられ

た家は、どうしてかよく記憶して居る。だから元の厩舎の近くに來ると、ひどく懐しがらものだと謂つて居た。

斯んな生活をして馬はどしどしと死んで行く。死んではならぬと云ふ點だけは、僅に人間と共通した利害であるが、さて生かして置いてどうすると謂ふか。やはり二十五歳の天壽を全うする迄は、手綱轡で驅使するばかりである。之を思ふと大津の東町しほせよし仕合吉と染た腹掛も當にならぬ。其仕合は結局飼主の仕合で、馬の幸福は馬自身が考へ出すまで、まだ此世の中には存在はせず、馬の神と謂つても實は人間の神で、馬が祭らぬ限りは御利益は馬の上には降らぬのだ。さうしてそんな事を些しも知らぬから、馬は黙々として人に附いて、馬頭様の前を通つて居る。さもく我運命を承認するかの如く、一步毎に合點々々しながらあるいて居る。(三州下山にて)

杉平と松平

上

雁峰山がんほうざんの平板な横面を、搔きつくやうにして登り越えようと、あちらの麓にはスギダヒラと謂ふ一里がある。作手ついでの三十六部落中では、是でも一番に海に近いのだ。併し豊川の下流を汽車でばかり渡る者には、幾度通つて見てもあんな屏風の如き山嶺の北蔭に、更に別箇の小天地があらうとは考へられぬ。作手の谷の水は三筋ともに、巴山の周圍を廻流して、何れも意外の方面から平野に下つて居る爲に、杉平のあたりが却つて山奥の感じを與へるのである。

御前石峠ごぜんいしの頂上まで出て見れば、伊勢灣も濱名湖も一目に眺められ、豊橋附近の繁華は手に

取るやうであるが、幾ら弘々として居ても他處は他處だ。杉平の人はやはり杉平の、平和な谷合に戻つて寝た。それが少なくとも五百年來のことである。

今でも盛んに杉山を仕立てゝ居る。手木(テギ)と名づけて四尋ばかりの繩の兩端に、一尺五六寸の棒を結び、それを高い枝にからみ附けながら、十間もある杉の木に登り、冬から春にかけて杉の皮を剥くのである。民家も多くは此皮を以て屋根を葺く。少し古くなつたものは寂しい色合だ。

又古風な胴短かの牛を澤山に飼つて居て、牛の放牧の爲に處々に草山がある。牛が自然に踏み開けた小徑は、人間のつけた路によく似て居るが、氣をつけて見ると處々切れて居る。それが山腹を細かくくぎつて居て、遠く之を望めば若い松球のやうである。

全體に可なり開けた在所ではあるが、山一つ彼方に比べてあまりに變化がひどい故に、「作手三十六地獄」など昔からわる口を言はれたものださうな。之に對して土地の人たちが、「今も亡者が二人通つた」と謂つたのは、中世の所謂秀句の類であらう。手洗所と書いてチャライと

呼んだ部落などは、住民がたつた三戸である。曾て鄰のユンギ(弓木)といふ村の者が通ると、一人の親爺が路傍の岩に腰掛けて、首をかしげてちつとして居る。何をして居るかと思ふと「うん今日は村寄合ひだ」と答へたと云ふ話もある。

杉平から小さな一阪を越えると、南赤羽根といふ村に出る。家数が十四戸、之に鄰する北赤羽根は五六戸である。高寒の二字を以て形容すべき僻地であつて、僅かな日當りの傾斜地に畠を耕して住んで居る。元龜天正の交に、奥平殿の家來に尾藤源内、黒屋久助二人の者、各之を知行すと傳へ、今も村には其苗字がある。二人は勇士であつて、宇都木阪の勝ち戦の時に討死をした。こんな山畑を耕して居ても、なほ御主の爲に命をまわらす義理のあつたことは、悲しい話だと思つた。

奥平氏は忘れるほど古い時から、作手一郷の地頭であつた。東鄰の菅沼氏と共に、武田と徳川との間に挟まつて迷惑をした。結局意を決して長篠籠城の武功を立てる前には、あたら忠義の家來を討たせたのみか、武田へ人質に取られた妻と幼ない弟とは、門谷の金剛堂の前で磔に

人だ。運やら天然やら私にも分らぬが、何にせよ杉平だから、土の色も黒く北向きで水分が豊富で、兩側の山が急であつた。之に反して松平の方は、花崗岩の露頭の、白石爛たる小松山であつた。山川の流のちようど折れ曲りの角に當り、小さな盆地の村であることは同じでも、屋敷の後の岡に登ると、松の間から西參河の平原が見えた。作手市場の奥平八郎左衛門の住居などは、要害の點では羨まれたが、四方は濕地が多く眺望も何も無かつたに反して、松平の山には藤躑躅ふたつじが多く、又月の名所でもあつた。

この松平の代々の太郎左衛門の一人に、連歌のすきな老人があつた。其頃大濱の稱名寺の念佛團の中に、何阿彌とか云ふ聖坊主ひじりぼうずが、折々招かれて來て相手をした。時衆などには珍しい人品で、諸國を行脚して居た故に話が面白かつた。生れは遠い上州だと謂つたが誰も身元を調べたのでは無い。普通で無かつたのは息子を一人連れて居り、それが又發明な器量の好い青年で素朴な松平人に愛せられた。或は何等かの戀物語があつたのかも知れぬが、そんな事を語り傳へるやうな時世では無かつた。兎に角に斯う云ふ和合が元になつて、所望せられて入聲となり

其間に生れたのが、紛れも無い徳川公爵の先祖である。

だからもし地を替へて此邊が杉平だつたら、とても其様な奇抜な血の改良はむつかしかつたかと思ふ。此種の縁組の結果は大抵の場合良である。それからは小規模ながらも、代々續けて豪傑が生れた。松平の岡に登ると、川下の岩津の山は誰が見てもよい山だ。乃ち久しく心掛けて居て、便宜を見定めてそれへ引移つた。岩津に住んで居てなほ工夫くわすすると、岡崎の方が更に形勝である故に、又策略を廻らして之を乗取つたのである。

それから後の事は歴史に載せてある。之を要するに人の顔さへ見ると、無暗に松平の苗字をくれて遣つて、日本を松平だらけにした。二十世紀になつても、人が皆よい苗字だと思つて居る。米合衆國などでさへ、今の大使の以前にまだ幾人かの松平といふ名士を識つて居たのである。さうして杉平の方はどうだ。

我々の生れた家の後の山に、松があるか杉の木が立つて居るかの、輕んずべからざること此の如しと言はうか。或は又松平たり杉平たる何かあらんと言ふか。何れにしても我々の、到底土の子であることだけは、斯うして證據立てるからは認めねばならぬ。それとも又杉平の暗い谷に、有明月夜の風情は味はへずとも、夜話すきの庄屋の隠居はあつたかも知れず、何も連歌と念佛がはやらすとも、零落した名士が來て食客をしたかも知れぬ。即ちさういふ縁組の太郎左衛門の家のみに成立つたのも、たくましい子供の生れたのも、乃至は三河の山奥の多くの松平のたゞ一つが、松茸と薪の産地として終らなかつたのも、すべて皆天意であり、又は史的偶然であつたのであらうか。あの杉平の村の村民の爲に、何とか一つ判断を下してやりたいものだ。

還らざりし人

上

和田君などは岡崎にちやんと親の家が有るのに、宿帳に笑ひながら其番地を書いて、我々の旅館に泊つてしまった。さうして翌日に爲つて大人に逢ひに往つた。晩には又「おい、君」と云ふ程度の數十名の知人と會食して、夜汽車で東京へ還つて行くのだ。そんな事をするから、愈々我が眞澄翁が氣の毒に爲つてしまふでは無いか。

菅江眞澄は二十八の年にこの岡崎を出て、約五十箇年の間北日本に、家の無い生活を續けて死んだ學者である。墓は秋田の寺内村の古四王神社の附近に、是も今は絶家した鎌田氏の墓地

を借りて營まれて居る。晩年最も親しかつた鳥屋長秋の碑文にも、年は七十六七とあるだけで詳しい經歷は舊友の子孫も傳へて居らぬ。岡崎では曾て其様な人が、生れ且つ去つたことを知つて居る者さへも無いやうであつた。實に怖ろしいのは百年の力である。

彼は歎き悲しみつゝ次第に故郷を遠ざかつて往つた。四十頃までの日記には其悲しみの歌が幾つと無く見えて居る。最初は足助あすけあたりから、矢矧の川上を越えて出たものらしい。其時分の紀行は美濃路で水の中に失つたと自ら謂つて居る。今在るものは天明三年に、信州下伊那から筆が起してある。即ち世に所謂眞澄遊覽記の第一卷である。遊覽どころか斯な苦しい旅であつた。伊那から次は諏訪筑摩、更級の月も見れば戸隠にも參詣したが、同じ處には永く足を止めず、翌年は越後國を通り抜けて、秋の末に出羽の庄内に入つてしまった。其から以後は只北へ進むばかりで、文政十二年に此世を辭するまで、終に日暖かなる東海の岸には出なかつたのである。

さうして毎に故郷を思慕して居る。一つには新たな生活の絆を求めなかつた爲も有らうが、

還ることの出来なかつた不思議な事情が、殊に彼の旅を淋しくしたやうである。或は繼母に憎まれて、家を追はれたと云ふ説も有つたが、根の無い推量である。眞澄の日記には二親の安否を氣遣つたことが屢々書いてある。しかも音信を通じたやうな様子も見えぬ。家では恐らくは出た日を命日として居たことであらう。誠に萍の如き生涯であつた。豊かなる天分を持ちながら、土に根が無いばかりに其花は賞翫せられなかつた。

其代りには彼の遺書に由つて、旅行が一の大なる藝術なることが立證せられた。時代の拘束の多い歌よりも繪よりも、漂泊其物が自在に彼を清く美しい境に導いて居る。所謂遊覽記は單に之を世に留めた樂譜の如きものである。彼は限ある島國の偏土に於ても、尙季節と地方とを按じて珍しい旅行を續け、未知の諸州に於て到る處、泣いて別れる程の友人を見出して居る。人情と山水との最も秀麗なるものを綴り合せて、愁多き其孤獨生涯を彩色せんと試みて居る。

下

眞澄翁の旅の跡は「奥の細道」よりも自由に、又「採藥記」よりも更に大膽であつた。どんな立派な地圖に相談しても、とても計畫の出来ないほど、宏大にして同時に閑靜な逍遙であつた。旅を命とする人の魂以外に、何物も彼を此路に導き得たものは無い筈である。

出羽では三山の參詣から、酒田を経て將に滅びんとする象潟へ、最初は古俳人の足跡を辿つたが、其より西馬音内に山を越え、小野小町が出たと云ふ雄勝郡に遊んで後、次第に雄物川の岸づたひに、秋田の城下の方へ下つたやうである。日記は此間四月ばかり絶えて居て、次の卷は男鹿と津輕との國境の、今でも淋しい木蓮子の漁村から始まつて居る。深浦と鯨澤は夢の花咲く湊であるが、其中程には大間崎の荒濱が有る。南に天女の衣のやうな男鹿の遠山が隠れる時、北には龍飛を越えて松前の山が見え、大島小島が波濤の上に浮んで来る。岩木山の麓を東へ廻ると、弘前郊外の豊かな在所には、風流の士が多かつた。此等の人々とは約束が有つたと見えて、十幾年かを隔て、又來て長く遊んで居る。

併し初度には僅かしか津輕に留らず、矢立を越えて比内に入つて往つた。即ち鑛山以前の淋しい北秋田郡である。それから鹿角二戸の山村を経て南部領に入り、北上の流に附いて南は水澤平泉の附近まで下つて、水の暫くは淀むが如く、二年足らずを此邊で過した。寛政元年には齡三十六七であつたが、忽然として再び北征の長い旅に上つて居る。今度は岩手の靈山を左に取つて、盛岡も過ぎ野邊地も過ぎ、青森油川も一夜づゝで、三厩の泊に風を待ち、眞直に蝦夷地に渡つてしまつた。固より彼は冒険者では無かつた。松前藩の上流と交つたのは専ら文藝の方面であつたが、而も折々は遠い浦々を巡つて、漁具や海の草の種類を問ひ、又は淋しい雪中の小屋に宿を借りて、行脚の僧と故郷を語り明した夜もあつた。アイヌに就ての親切な觀察を數卷の書に編んだのは此四年の滞在の間である。十月茫々と風の吹く或朝に、便船は果知らぬ旅の客を、終に本土の一角に運び返した。下北半島の奥戸と云ふ湊で、又草鞋をはいたと記して居る。南に向ふときは故らに遅々として行つたかとも思はれる。如何なる新因縁に催されたものか、假の宿りの宇會利山下の町や村に、更に四年の春秋は算へられた。或年の冬は深い雪

を冒して、尾駁小川原の沼の邊まで出て來たこともあつたが、旅は悲しいと云ふやうな歌を詠んで、再び田名部の知人の宅へ、戻つて往つて正月を迎へた。

一年將盡夜 萬里未歸人

寥落悲前事 支離笑此身

斯な詩を口ずさんだやうな除夜の晩を経験して居る。支離と謂ふのはかたわのことで無かつたかも知らぬが、眞澄は年老い十餘年の津輕の旅を切上げて、土と爲るべく再び秋田領へ入つた頃は、時の間も頭巾を離したことが無いので、常被りと云ふ綽名を附けられたさうである。此頭巾で所々の花紅葉を訪ひ清水を尋ね、美しい繪を描き紀行を遺した。男鹿の半島だけでも六種の日記がある。さうして雪月花の出羽路と題する數十卷の地誌を半成にして、或村の神官の家で、第二の歸らぬ旅に赴いた。死んだ後に事を好む若者たち、餘りとしても不思議なる廿五年間の頭巾を、取つて見て眞相を知らうとしたが、老人が之を制止して果さなかつたと謂ふ。恐らくは大きな刀疵でも有つたのだらうと謂ふ人もあるが、それは只有りさうな推測に止まつ

て居る。永遠は毎に色々の傷を包んで往つてしまふが、殊に此翁の後姿は、いつまでも見送つて居たい感じがする。(三州岡崎)

ブシユマンまで

桓武大帝の延暦十何年かに、若い昆崙人を只一人乗せた船が、三河の海邊に漂着したと云ふ故跡は、今の矢矧の古川の右岸に在る、天竹と云ふ村であらうと謂ふことだ。此青年も還らざりし人である。常に悲しい聲で何か歌つて居たと、記録にも見えて居る。耳に環をはめたこの黒い男の血は夙に紛れてしまつたが、我々が木綿の種を知つたのは此時が最初で、しかも後代に及んで幡豆海邊の低地は、見渡す限り綿畠の白い波であつた。それが元の種からで無かつたとすれば、愈々奇なる偶然である。

江戸で三白と稱へたのは三河白木綿の略である。此ばかり曲尺で三丈二尺を一反とするのは専ら看板腹掛足袋股引の材料とした爲だらうか、何故に特に此地方の産を賞美したかはまだ分

らぬ。維新以後其需要が急に増し、一方には紡績の機械が早く利用せられた結果、支那から綿花の入つて來たのもやはり此邊が最初であつた。さうすると織るばかりが農家の作業に爲つて絲を引く仕事は先づ村落から離れてしまつた。絲と木綿と交易した小買と謂ふ制度が、いつか賃機と爲り、終には全部工場の管理に歸したのは、他の地方も同じである。

併し水車を利用する紡績だけは、今以て岡崎近傍の特色である。土地では之を「から紡」と呼んで居る、臥雲と云ふ信州の僧が工夫をしたと云ふ傳へもあるが、もうそろ／＼崑崙漂流式に話がなりかゝつて居る、實際家には沿革は必要が無い。何かと謂ふうちに男川筋から郡塚川其他の小流れの岸まで車小屋を建て續けた。處がさあ綿と謂ふ時代に爲つて、輸入免稅が先づ土地の生産を絶やし、次には精巧な機械の競争を受けて、外棉加工の利益が望まれなくなり、再び曲折して今日の彈き綿（びん）の作業に向ふに至つた。短い歲月の間には實に珍しい變化である。

是から後も必らず變化するだらうが、我々は只悲歌する所の崑崙人である。見やうに由つては今が究竟底かとも感じられる。屑木綿をほぐして綿にする作業なども、殆ど智慮と技巧とを

盡して居る。近頃は染料を節約する爲に、初に屑物の色分けをする。紅がゝつた木綿切を集めて、所謂煉瓦色の太い絲を引く綿に弾いて居る。格別面倒な調査はせずとも、古いから自然にそんな色合に爲る。其絲でざつと織つた大幅物が、毛布と云ふ名を帯びて阿弗利加の内地へ行くさうだ。近年まで白耳義の商人が賣つて居たのを、戦争以來ダアバンあたりから日本へ買出しに來た。嗅覺ばかりが大いに進んだあの方面の御得意様は、何と我々を呼んで居るか知らぬが、どうやら以前と異なる香がする爲に、此頃漸く日本の存在を承認してくれたことと思ふ。他日此生蠶の歴史が夜明けた時、くり舟に乗つて漂流するやうな東海人の文明は、果してどんな痕跡を其上に遺して居るだらうか。出來るものなら今一度後に來て見たい。

茂れ松山

二十年來汽車で通るたびに、自分は遠近の岡の色の、次第に美しくなつて來るのを感じた。此綠なる天然に隠れて、幾人かの裕福な學者が、各其書庫を擁して老いず衰へず、靜かに研究を續けて居るかと思ふと嬉しかつた。今度のやうに歩き且ついで見ると、やはり花は落ち水は流れ、人は去り鴉空しく啼くと云ふ淋しい野も有つた。一方の禿山の芒たぎを引剝いで、此方の砂防工事の堅固にするやうな只の變化も些しは有つた。

地方の篤學者の永く憧憬的と爲つて居るのは羨ましい。此でこそ帷を垂れて生涯を讀書に送つた甲斐がある。唯平凡なる悲しみだが、彼等はあまりに夙く過去に屬して居る。豊橋の波多野氏などは子孫が家の學を見棄て、其藏書印の有る本が處々に散つて居る。西尾の岩瀬文庫

にも大分購入せられたさうである。刈谷の村上氏の如きも、もう彼家のもので無くなつた、父子合著の書物なども出たやうだが、まだ完全に其文庫を利用し得なかつた筈である。自分は若い頃に名を聞いて、一度は門を叩いて見たいと思つたのがもう此通りである。

併し一軒の家の變遷とは獨立して、學風は幸ひに世に傳はることゝ信ずる。現に文庫を愛する好い癖だけは、三河の國振と爲つたと謂つてもよい。右の村上氏の集積などは、殆ど全部が刈谷の圖書館の有に歸した。土地の人穴戸醫學士の寄進ださうである。醫者には昔から志の深い人が有る。長篠の牧野文齋氏の如きも、巨費を投じて熱心に郷土の書を購入ひ又は寫させて居る。私かに一人の家の寶とするに比べると、どの位學問に近くなつたか分らぬ。是以上は單に近づき得る人の有りや無しやだけが問題である。

岩瀬文庫は一旦公開して後に又閉ぢて居る。擴張の爲に却つて歳月が空しく過ぎてしまふ。此文庫には弘く海内の書が集まらうとして居る。珍しい畫卷などの外に、或は度會氏の舊傳を調べた編集と謂ひ、柳原伯が賣られた大切な記録日記の類と謂ひ、何れも行く行くは西尾を

有名の地にするものである。但し整理中でも學者は老いて止まぬものなることを考へたら、なほ少しく終局の目的の方へ、急がねばなるまいと感じたことである。

西尾には鍋屋と謂つて、何と言つても本を貸さぬので有名な家がある。同じ幡豆郡の寺津には、あまり貸したので大分無くした渡邊政香と云ふ人があつた。渡邊翁は三河志と云ふ大著を未完成で遺し去つた學者である。此本は後に鍋屋に歸し、もうとても見られぬかと思つたら、西尾の小學校に二部の複本と一緒に置いてあつた。作つた人の心持を考へると、死後には一人でも多くの學者に見てもらひ、増補訂正を必要ならばさせたかつたらうに、誠に此邊の善人たちは、何故に古書が貴重なるかを解して居ないやうである。

(大正九年十一月、東京朝日新聞)

秋の山のスケッチ

おう、竹さんどうした。おら死んだかと思つたぜ。あまり酒がえらいでえ。時は大正九年十月三十日の朝の九時過ぎ、處は三河美濃尾張の境なる三國山の東、金毘羅様の峠の大きな松の樹の蔭である。斯く謂ふ人物は、大きなカバンを自轉車にくくり付け、此手帖の主を案内してくれる飯野の經師屋、年は四十三四、清洲きよすの生れで方々を知つて居る一癖ある男だ。竹さんは六十に近い親爺、だまつて聽いて徐ろに煙草入れを抜いた。つれが一人ある。

竹さんは美濃の下石かかしの鶴仲買人である。まだ鳥小屋の前景氣の時分に、此邊の村をあるいて高い値で鶴を買ふ豫約をした。さうして今になつて逃げまはつて居るのである。それを取つかまへるのが一つの目的で、私の案内者を志願して來たことが今わかつた。カバンの脇の風呂敷

包は、何かと思つたらみな鶉であつた。果して圖星に中つたので、大得意で調子が高い。不義理の竹さんは一言も無く閉息し、澁々十圓何がしを爰で勘定し、高價な鶉を文字通りに背負ひ込んだ。

多治見からも鳥が来る。東からも鳥が来る。麴は出す。さつぱり値が出ず。なるだけ値を殺してくれ。もう此値では買はぬと思つてくれ。おれもはだしはつらい。

東と云ふのは木曾の妻籠つまごから坂下の邊のこと、あの地方でも山の鳥屋とやで、到る處に鶉を取つて居る。

麴漬の麴が間に合はぬときは、鶉ばかり買込む製造家が少ないから、相場がいつも安いのである。

鳥屋の衆は多く来れば悦ぶが、仲買は多く捕れては困るのだ。おら約束したとやが七十からある。

をれの方は三十四だ。

此天気では今朝も大分捕れたらう。あれ、あんなに鳴いて居る。

此風では来るぜ。をれは胸が痛くなる。

全體はじめに十錢ときめながら、十三文にも十四文にも上げたが悪いのだ。

さうだ〜。

十四文とは一羽十四錢といふことである。經師屋はもう取る者を取つたから、いゝ氣で泣言の相槌をうつて居る。

此中にはトラが四つある。始末をして置いてくれ。

トラとは虎鶉ねえ即ち鶉ねえのことで、禁鳥だから見付けられぬやうにせよと謂ふのである。夜明前の眞暗闇にヒューヒューと啼いて来る。幾ら萬葉集に「ぬえこ鳥うら鳴きをれば」など、詠まれた大切な鳥でも、飛んで来て引籠るからには仕方が無い。

禁鳥はみんな嘴が細いのに、どうして鶉だけは、嘴が太くて禁じられて居るのでござりましよう。

蟲は捕つて食はなくとも、やはり数が少なくて絶えるといけぬから、禁じて居るのだらう。はゝあ、さうでござりますか。

斯んなことを話して柿野の村へ降りて來ると、なるほど五十七の鶉を棒にとほして、右からも左からも人が通る。日當りに四むすしの籠をならべて、鳥を洗つてやつて居る家が多い。店には紙の看板に、

モヲチエゴマ有り升

と云ふのが方々に見える。モヲチとは鶉のこと、荏胡麻は四の鳥の餌用である。山の方を仰ぎ見ると、高い低い崖の頭のやうな處に、幾つと無く枯れた竹の圍ひがある。それが皆とやである。木曾では松の大枝をさし、又は天然の松林を利用して居るが、此邊ではこんな簡単なことをして居る。それでも年に何十萬の鶉が、中部日本の山々では捕れるのだ。

(大正十四年十一月、民族)

向小多良

自分は天下多數の佐藤君松田君波多野君河村君等と共に、共同の先祖として田原藤太秀郷を仰ぐの光榮を有して居る。之に由つて昨年の十一月には、右中興の英傑の名字の地を見て來ようと思ひ立ち、妙な取合せながら大阪に於ける講演の序を以て、近江の信樂しがらきから紅葉の多い山路を越えて、城州の宇治田原の靜かな谷へ入つて見た。宇治橋の歴史は比類稀なる大變遷である。そも武内宿禰の雄々しい歌物語に始つて、橋姫の信仰は乃ち美麗なる源氏の君の艶話を潤色し、一方には又の頼通頼政から、近世の通圓幸齋が生活の痕まで、悉く此橋の袂に纏綿して居るかと思ふと、今は又水に臨んだ大阪電車の花やかな燈火が、此川水力發電の偉業を描き出して居る。しかも誰か思はんや、百歩の川上には喜撰の歌法師、その又上流には猿丸太夫永く

幽居の名残を留め、更に奥深く入つては我が田原殿あつて、爰に一區の美田を子孫の爲に經營し去つたことを。

宇治田原は瓦屋根のやうな地形である。僅かな屋の棟を水分れにして、近江の田原と一続きである。秀郷が領して居たのは近江の田原だけと云ふ説もある。併しそれでは「仍て田原藤太と名乗つた」と言ふのは、餘りに分内が狭い。此家で本領は固より東國に歴としたものがあつたが、京近くの莊園は恐らくは父方の特權を繼承したもので、是有るが爲に只の田舎武士に比べて、遙かに優勝な地位を保ち得たのであらう。其頃逢阪の關路は今の横濱の如き都の玄關であつた。秀郷出京の折にはやはり勢多河の流に付いて、湖岸の官道まで下つたものであらう。野州の植民地の往來も勿論同じ路であつた。爰に於てか威名は此附近に鳴り響き、琵琶湖の龍神までが彼の武勇を熟知するやうになつたのである。

家の自慢は假令千年前の事でもやはり失禮に當るから、是より以上には説き立てぬことにする。さても近江の貴生川驛で汽車を降り、犬が綱曳く人力車を傭つたことであつたが、此車夫

は移住者とも見えぬのに、ちつとも田原殿の事を知つて居らぬ。自分は長野の町を過ぐるまでわざと話を瀬戸物の火鉢などの問題に低徊させて、徐ろに田原の古今に及ばんとすること、恰も若い猫の鼠を弄ぶが如くであつた。「旦那は何處へ御出でるのです」と聞くから、田原へ行くのだよと少しばかり得意な返答をして見たが、どうも其からの話は調子が合はぬ。タアロなら此道ですぞと左の方を指したり、朝宮の道だと城州へ出てしまひますと當然の事を言つたりする。そこで不見識であつたが五萬分の一の地圖を車上にひろげ、車夫の言と對照して見ると結局此先生の腦中には、宇治田原と云ふ地名が全然無かつたこと、従つて自分の田原と彼の多羅尾とが、混線して居たことを發見した。多羅尾ならば信樂の御茶と共に、自分も夙くから知つて居るが、其が我々の田原と聞誤るやうなタアロであらうとは思はなかつた。

そこで車の上で斯んな事を考へた。語勢や「なまり」の經驗も無くして、無暗に地名の比較研究を發表するのは劍呑である。田原は今日まで稻作に適する草地の意味と思つて居た。山に據つた里に此名は多い。大野君の在所相州の波多野莊で秀郷の子孫の拓いた村にも田原が有る。

現に又自分の生れた村も同名であつた。猶又大和其他の國にも古い田原がある。何れも田の原と解してもよく通ずる。一方には多羅尾のタラ、是も亦多い山村の地名である。天武天皇紀の壬申の亂の條にも伊賀の荊萩野などがあつて、若芽を食用に供するタラと云ふ木、刺の怖しい所から我々が幼時「よめたき」なども呼んで居た植物の、簇り生ずる山野の地を、開墾前の名稱のまゝに唱へて居るものと考へて居たのである。併し此様子では二つの地名は元は同一で、之を文字にする際に多少音韻上の無理を忍び、見た處さうかと思はれるやうな語に變へたこと、恰も近世の蝦夷樺太の地名の類では無かつたらうか。萬一さうであつたとすれば、犬を相棒にして居る長野の車夫は、えらい事を口傳して居たものである。

是は併し空想かも知れぬ。結局は文字に據つて解した通説が正しいのかも知れぬが、タラと云ふ地名も此外に中々多く、其全部を此木の多かつた爲と断定するには、植物生態の研究が必要である。更に又地形の異同も考へて見ねばならぬ。近江の近くでは若狭の太良の保がある。美濃の時多良の多良村は或は鱈尾とも書くさうである。其ばかりでは無く、此邊には何々ダラ

ラといふ地が至つて多い。ダアラは又ダラとも謂つて居る。タヒラの訛音かと思へばさうでない證據に、是は多くは阪路である。唯附近の山地と比べて傾斜が遙かに緩く、所謂段層耕作に適するだけの、地味と水利とを具へて居る爲に、早くから村になつて居るのである。

ダラの例は至つて多いが、有名なものは殆ど無い。唯一つ自分の記憶して居るのは、美濃の長良川のすつと上流、長瀧の長瀧寺と云ふ白山南表の大寺の址へ行く途に、白鳥といふ市の立つ一村がある。越前の穴馬から油阪を越えて買物に出て来る處で、昔の軍事上の要衝である。この白鳥と川を相隔て、ムカフコダラといふ一部落がある。東を向いた一箇の入野で、草木と茅屋と隠翳して趣を成す古風な里であるが、何故か以前から人氣が悪く、市へ出ては酒を呑み喧嘩を始め、勘定でも踏まうと云ふやうな人が多かつた。其をつひ近年になつてから、村の有力者の志深い者があつて、色々として子弟に貯金の興味を覚えさせ、後には親たちまでも少しづつ感化して、家業に熱心するやうな氣風にしたといふ話であつた。自分が縣道の岐路から此村を眺めて、村の様子も其名前も、共に面白いと感心して居ると、校長の鹽田君が、かう云

ふ歌が昔からありますと故へてくれた。

向ふ小だらの牛の子を見やれ、親がくろけりや子も黒い。

ほう其は又大いに面白い。處が十年來の種畜改良の結果、此節では色々の斑ら牛が、此村からも出ると云ふでは無いですか。私ならばかういふ風に歌はせたいものですと即吟の一句、鸚鵡小町の故智を學んだものであるが、恐くは今は自分以外に之を記憶して居る人もあるまい。

向ふ小だらの牛の子を見やれ、親が黒うても子は白い。

(大正八年五月、同人)

木曾より五箇山へ

明治四十年五月二十八日、晴、雲多し。

木曾の上松の宿屋境重の横手より、田の畔道を川端へ下る。道の上で働ける鐵道の工夫等、頻りにばら／＼と土や小石をこぼす。

木曾川を西へ渡る、こゝにも名物の釣越は有れど平水には舟にて渡す。三留野の青木君、自ら鐵條の綱を手繰る。

茲に落合ふ川は小川といふ。小川の澤は眞直に西へ入り、東の方駒嶽の雪と相對す。駒嶽の雪より滑川といふ急傾斜の川流れ下る。空澤なり。上松の民家はあたかもこの十文字の結び目に在り。

小川越の頂上を高倉と云ふ。西に御嶽、東に駒嶽を一時に見る所なり。閑古鳥啼く。小川の奥は凡て御料なり。左手の初めの澤は麝香澤、此澤の檜は最も名木なり。麝香澤は檜の高き香より付けた名なるよし。

次の澤は南の股、北の股。南の股に来て初めて杣木を引く古代の掛聲を聞きたり。木曾の杣は今でも決して大鋸は使はず、木の前後より斧を入れるなり。倒るべき方を受口と云ひ、反対の方の切目を蔽口おほひぐちと云ふ。大木は三方から斧を入れる。之をば弦掛と云ふ。鼎の脚のやうに残したる三脚の、一つを切放せば向側へ倒るゝなり。

大木の倒るゝ音は烈しきものなり。中空に非常な塵が立つ。谷には日傭が鳶口の音、さいたはつたの差圖の聲、唸しき労働なり。我輩が生活は之に比ぶれば遊樂に近し。

檜の枯林の中に、萬年草の廣場あり。檜鳥は地から三尺ばかりの處をあちこちと飛廻る。其間に山の労働者の小屋あり。檜皮にて隙間だらけに圍みてあり。

五月二十九日、きれくゝの雲、一度は雨。

小川の北の股より、王瀧村の瀬戸川の奥へ越す。山路半ば棧道なり。源頭の森林には却つて平地多し。溪流の力の未だ十分に排水を爲し得ざる林地に、昔焼畑を造りし跡あり。ソレと云ふは焼畑のことなり。

石楠花花盛り。淡紅と白の二種、共に優しく柔なる花なるに、葉の色はまことに無骨なり。新たに檜の桁板にて造れる柵小屋あり。黒き常磐木の林の中に美しく光れり。

王瀧村の上島にて晝食を食ふ。此より川上にも人家はあれど、先づ此處が山と世間との境なり。

王瀧川は木曾川本流よりも立派なり、本流は國道を頼みて天下に聞ゆれど、實は根つからの凡水なり。

上島より上に大字野口、王瀧川が作りたる大野の入口なり。山の中腹に巖石の露出する所を此邊にてはゴウロと云ふ。

氷ヶ瀬まではよき道なり。左は美濃の付知つけちへ行く新道、右の山道に入る。苦しき峠あり。



小川越の頂上を高倉と云ふ。西に御嶽、東に駒嶽を一時に見る所なり。閑古鳥啼く。小川の奥は凡て御料なり。左手の初めの澤は麝香澤、此澤の檜は最も名木なり。麝香澤は檜の高き香より付けた名なるよし。

次の澤は南の股、北の股。南の股に来て初めて柚木を引く古代の掛聲を聞きたり。木曾の柚は今でも決して大鋸は使はず、木の前後より斧を入れるゝなり。倒るべき方を受口と云ひ、反対の方の切目を蔽口おほひぐちと云ふ。大木は三方から斧を入れる。之をば弦掛と云ふ。鼎の脚のやうに残したる三脚の、一つを切放せば向側へ倒るゝなり。

大木の倒るゝ音は烈しきものなり。中空に非常な塵が立つ。谷には日傭が鳶口の音、さいたはつたの差圖の聲、峻しき労働なり。我輩が生活は之に比ぶれば遊樂に近し。

檜の枯林の中に、萬年草の廣場あり。檜鳥は地から三尺ばかりの處をあちこちと飛廻る。其間に山の労働者の小屋あり。檜皮にて隙間だらけに圍みてあり。

五月二十九日、きれぐの雲、一度は雨。

小川の北の股より、王瀧村の瀬戸川の奥へ越す。山路半ば棧道なり。源頭の森林には却つて平地多し。溪流の力の未だ十分に排水を爲し得ざる林地に、昔焼畑を造りし跡あり。ゾレと云ふは焼畑のことなり。

石楠花花盛り。淡紅と白の二種、共に優しく柔なる花なるに、葉の色はまことに無骨なり。新たに檜の桁板にて造れる柵小屋あり。黒き常磐木の林の中に美しく光れり。

王瀧村の上島にて晝食を食ふ。此より川上にも人家はあれど、先づ此處が山と世間との境なり。

王瀧川は木曾川本流よりも立派なり、本流は國道を頼みて天下に聞ゆれど、實は根つからの凡水なり。

上島より上に大字野口、王瀧川が作りたる大野の入口なり。山の中腹に巖石の露出する所を此邊にてはゴウロと云ふ。

氷ヶ瀬まではよき道なり。左は美濃の付知つひちへ行く新道、右の山道に入る。苦しき峠あり。

柳ヶ瀬には一軒家あり。母と夫婦と女の子二人、亭主は病身なりとて、容貌少年の如し。濁川こゝにて王瀧川と落合ふ。御嶽の地獄谷より出づる川なり。上流にぬるき温泉あり。下り行きて泊る。

深夜に湯壺にて、美濃の加子母の老人と話をす。十五六年前まで群馬縣に行きて住めり。妾に男女二人の子ありしを、其妾にやりて獨り故郷に歸りたりと。博奕の好きさうな爺なり。但し今はよほど衰へて居る風なり。

五月三十日、快晴。

再び王瀧川の澤に引返し、なほ川上へ行く。駒鳥昨日より到る處に啼く。

瀧越は十七戸、峻しき峠を二つ越え、三里餘にて漸く上島へ出ると云ふ山里なり。太古の川底なりし平地を十町餘耕作す。世間にては三浦とも云へど、三浦とは此奥山の總稱なり。全村皆三浦氏なり。相模の三浦の殘黨と云ふも旁證なし。兎も角も武士の落人なるべし。どの家が一番古いと云ふことの外、一の記録も口碑も無し。女は丸々世間を知らず。美濃より來て此村

に永住する教員の夫婦ありと聞く。お寺も醫者も無し。

山査子なるべきか、土地にて小梨といふ花を、手桶に一杯折り來りて軒の下に置きり。家主が款待振なるべし。檜皮にて編みたる一尺ばかりの四角な籠、山に行く者は必ず持つ。新しきものは色合何とも言はれずうつくし。

又一つえらい峠を越す。越して再び王瀧川の岸に下る。小路は去年の洪水に損じたれば、川の石の上を歩む。深山の景色を畫く者、常に晝尙暗しといへど、此溪は極めて明るし。思ふに今日は此の如き好天氣なり。此川は中々廣き川にて、兩岸の崖遠く、しかも川の石はすべて花崗石なる上、水の邊は針葉樹少く、奥山の木は今が若葉の薄緑なれば、取集めて斯く明るく感ぜらるゝならん。靜かにて明るきはよき感じなり。處々の瀨に美濃の岩魚釣を見る。久しく物言ふことを忘れたる人々なり。

若葉の林の日影をよろこび、熊笹の刈株を踏みて行くうちに、谷は次第に開けて水の音少しく遠ざかり、又檜樅の原始林に入る。土浦の澤には針金の釣橋を渡る。御料所屬の休泊小屋の

前に休む。

榎小屋と云ふ所にて、愈王瀧の本谷に別れ、左へ水無澤を上る。榎小屋は今は無くなり、其跡に竊小屋あり。瀧越の男三人、こゝに來りて夏中竊を製す。此邊すべてつめたき水溜なり。芍薬花さく。

鳩啼く。聲が里の山鳩とは異なり。青鳩ですよと文六は云ふ。今一人の同行者、あの位うまい鳥はありませんと云ふ。鳩は之に構はず平氣で啼く。所謂妻を呼ぶ季節なりと見ゆ。

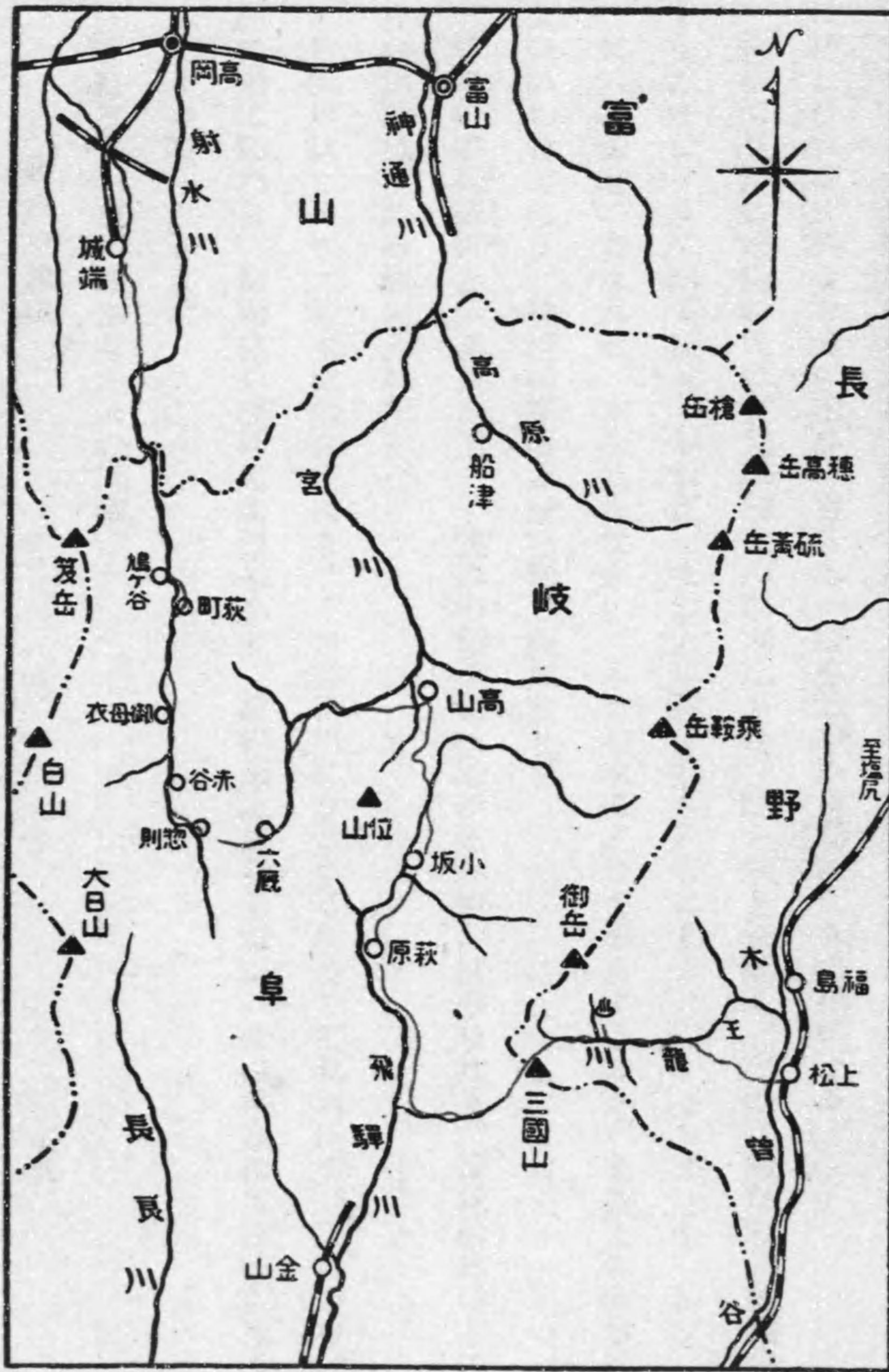
ごみ澤を上りきりて、三國山の頂上より八町北に出づ。美濃飛驒の山の額百ばかり遠近に見ゆ。處々の煙。

嶺通りに數十の塚あり。遙に御嶽の方に列れり。根笹其上に叢生す。何れの時代にか國境を定めたるものなり。

人の爲の時は又渡鳥の通路なり。去年の鳥屋猶存し、霞網の竿なども残り居れり。

尾根の少し窪みたる所、岩のごろ／＼としたる所が飛驒への下口なり。五六歩下れば岩ぬれ

木曾より五箇山へ 明治四十二年



たり。これが竹原川の源頭にして、我等はその最初の涓滴より道連れと爲りしなり。川より外に道なければ、岩より岩に飛び、自分も一種意識のある瀧となりて里に下る。

初めて見たる飛驒の人は、兄弟三人の草刈なりき。眼と顔と皆圓く、中のは娘なり。躑躅咲く松原まで下りて来て振返り見れば、まことに暗く淋しき谷なりき。

文六は瀧越の者なれば、水を飲みながら、木曾の水ほどまからずと云ふ。まことに木曾はなつかしき山なり。飛驒の家も木曾と同じ板屋なり。

竹原村の御厩野みまのと云ふ里に出づ。美濃の加子母へ越ゆる縣道の峠の口なり。或家に息ひしに朴の葉に包みたる鮓をくれたり。

竹原川はこゝにて最早立派な川なり。その益田川に合流する所までを見届けて、下呂げろの吉村屋に来て寝たり。此町は以前河原に温泉あり、故に湯之島とも云ふ。今は洪水にて水底になりてたゞの町となれり。

五月三十一日、けふも上々の天氣。

下呂より小坂まで人力車。道は益田川の岸、桑畠の中、出逢ふは桑の葉を運ぶ車及籠なり。小坂より右へ、又落合川の上流、唐谷の御料林に入りて伐木を見る。此道三里餘。山の小屋に宿す。夜月よし。蛙啼く。

初めて蕨の粉を食ふ。これより北の山里、秋神の柚の者携へ來りしものと云ふ。六月一日、晴。

山を下る。柚の頭なる老人、途中まで案内して、木を流す堀川を見せる。竹の杖をつき、鹿の皮の山袴をはき、熊の皮の尻當をぶら下げたり。その寫眞をとりしがよく寫らす。

山の杜若花、草の丈三寸ほど。谷の向うなる嶮しき山に、藤の花極めて多し。

谷に臨みて大木の枒あり。花満開、花の数は千以上あるべし。朝日の影に全容を浴して、壯麗無上なり。道に墮ちたる花を拾ひて見るに、花片は淡紅にして底の端を鮮紅に染む。兼々進化論には腑に落ちざる廉ありしが、果して枒の木などの立派なるは、生長と種類保存との爲には非ず、此木が三十丈高く、花の底の鮮紅なるは恐らく彼の爲に必要にも非ず。人間を樂しま

しむる爲と推定する方遙に妥當なり。

溪流の對岸は絶壁にて御嶽へつゞけり。絶壁の上は廣き平地にて之を原八町と云ふ。栗の天然林なり。之を見つゝ獨り山を下る。

道に四寸ほどの蛇を見る。子供の時燐寸の箱に入れて飼置きしことを想ひ出す。昔巨人が巨蛇と闘ひし頃より、人の方は約百世なり、蛇の方は何百代を経たるか、お互に當時の強烈なる憎悪と畏怖とを遺傳して、今日なほ打解くること能はず、何とかして完全なる平和を恢復し、同情の眼を以て彼の鱗の美を鑑賞したきものなり。

溪も山もすべて青き中を、朝六の橋のみ白し。此橋を白く塗りたる人は心あるか。古き傳説をよく味ひて設計したるものか。

小坂より高山へ七里の車、途中こんな人々に出逢ふ。曰く、子持の女を載せたる人力。村會議員とも云ふべき男、手に團扇を持つ。旅稼の人夫二人又一人。職人二人、其一人は白衣。空の郵便車を曳く脚夫、笑ひながら來る。小學校の子供二人又六人。下駄材を積める荷馬車。萌

黄の風呂敷包を負うた娘。脚絆猿袴の商人。米俵を負へる馬、空荷馬車。旅の農夫。荒物類の荷車。子供を三人載せたる村の荷車。土方。堆肥の荷車を引く百姓の夫婦。電信の工夫。農夫谷川の水を見ながら来る。旅商人三人。下駄臺の荷馬車六。郡農會の技手と云ふ風の男。自轉車の高山人三人、やがて又引返し來り我車を追抜く。藥取の子供。石灰の俵を積む荷馬車。四十位の田舎の旦那、よき人力車に乗りて來る。若き木挽。郵便車。乾物の荷車。石灰の荷馬車六輛又四輛。二人にて曳く荷車に病人の婆、こはい顔をして寝て居る。乗馬を引く者。空荷車上に鹽物の籠一つ。農夫。子を負うた女。町へ出た百姓二人、又三人。夫婦にて曳く石灰車。高山の郵便配達人。買物に出た男四人。穀物の荷車。善光寺参りの老女二人。町へ出た人。躑躅を持てる女連三人等。

六月二日、午後僅かばかりの雷雨。

町見物、熊膽を求む。

宿の主人を招き白川村の話聞く。明日此山に入る用意を爲す。主人は越中の人にて、十五

より二十三の年まで白山の東の谷に銅山を經營してありしよし。早く成功して早く失敗したる派出なる經歷あり。其頃の白川村は面白かりしとのこと也。

色々の訪問者に接す。飛驒は思ひし程の山國には非ずと言ひしに、少しく悦ばざる人もありしやうに思はれたり。

六月三日、晴、午後四時雷雨。

郡上街道を三日町迄。右へ折れて牧ヶ洞の峠、峠を下りて夏厩なつぐらの村、時鳥無暗に啼く。此邊最も雪の深き所なりといふ。山の木はまだ都の四月頃の若芽なり。桃の花あり。

上小鳥かみせどりは寥落たる民居たり。山路板の車に行逢ふのみ。水力にて板を挽く僅なる小屋あり。又黄檗きはだを煮る小屋あり。とある野原には大木の梨の木七八本あり。年々よく實り、旅人來りて採り食ふ由。

行々小梨多し。即ち瀧越の手桶の花なり。紅白の二種ありて、白は李すももに似たり。六厩へ越ゆる小さき峠、満山此花の盛なり。遠く望めば林白く、近く行けば、薔薇の香あり。珍しき花見

なり。初めて旅に酔ふ。

贅澤なる言草ながら、丸々目的の無き旅をして見たし。毎年旅行に出づれど、まだ放縱散漫の趣味は解し得ず。旅行者の中には、自分は第二の階級に屬するか。親の大病で歸るほど無意味の旅行でも無けれど、さりとして遊歴の書家ほどの悠長さは無し。つまり興行人や間諜などの亞流なるべし。

六厩じんまやには焼畑多し、焼畑此あたりにては薙なと云ふ。此地は既に莊川村の内なり。輕岡峠にかかり雷雨に遭ふ。板を頭に載せて雨をしのぐ人を見る。

小倉の洋服を着たる若き男、ふらくと來る。同行者曰く、あれは莊川村の助役なり。今日の村會にて辭職を可決せられて歸る所なり。酔つて居るなりと云ふ。

三尾河みそがわ・一色いしき・總則そうのり・猿丸さるまる・新淵あたらふちと來れば、莊川の流はやゝ大きくなり、淵には鱒を捕る竹籠を掛けたり。路の側に少しの田、少しの麻畠あり。麻は薙畑にも作る。以前は一村の衣料大方この麻なりし、ヌノと云へば麻布のことなり。

夜、月色に背き、運送店の奥座敷に寝たり。

六月四日、晴、早天は霧。

此邊の躑躅は花大きく、色は濃艶なる朱なり。田の畔にも咲けり。田の畔に芍薬を栽ゑた家あり。

三方崩山、雪を戴きて遠く見ゆ。此溪谷の中心に當る。その直下に大字御母衣みほろあり。一戸にして三十人四十人の大家族ある村々は、凡てこの山の東麓に列れるなり。

葉小さき山桑にて蠶を養ふ。柘の樹多し、この實は山民冬の間の糧なり。

莊川村と白川村との境は小さき谷川なり。川上に尾上郷と云ふ二戸の大字あり。是より越前の大野郡へ幽かなる山路ありと云ふ。地圖には見えず。

御母衣に來て遠山某と云ふ舊家に憩ふ。今は郵便局長。家内の男女四十二人、有名なる話となりをれども、必ずしも特殊の家族制には非ざるべし。土地の不足なる山中の村にては、分家を制限して戸口の増加を防ぐことは折々ある例なり。唯此村々の慣習法はあまりに嚴肅にて、

戸主の外の男子はすべて子を持つことを許されず。生まれたる子は悉く母に屬し、母の家に養はれ、母の家の爲に労働する故に、かくの如く複雑なる大家内となりしのみ。狭き谷の底にて娶らぬ男と嫁がぬ女と、相呼ばひ靜かに遊ぶ態は、極めてクラシクなりと言ふべきか。首を回らせば世相は悉く世絆なり。淋しいとか退屈とか不自由とか云ふ語は、平野人の定義皆誤れり。齒と腕と白きときは、來りて綯繆纏綿し、頭が白くなれば乃ち淡く別れ去ると云ふ風流千萬なる境涯は、林の鳥と白川の男衆のみ之を獨占し、我等は到底其間の消息を解すること能はず。

里の家は皆草葺の切妻なり。傾斜急にして前より見れば家の高さの八〇%は屋根なり。横より見れば四階にて、第三階にて蠶を養ふ。屋敷を節約し兼ねて風雪の害を避けん爲に、かゝる西洋風の建築となりしなるべし。戸口を入れれば牛が居り、横に垂簾を掲げて上れば、爐ありて主人坐せり。

對岸の峻しき山の樹間に、ちら／＼と小屋見ゆ。炭焼かと思へば鑛脈を探る冒險者の宿舍なり。

り、大阪より異人も折々來ると云ふ。

萩町、鳩谷にて夕方になる。柘榴の葉の色、花の色、胸の痛くなるほど美しかりき。

六月五日、風雨。

早天に飯島を立つ。高山の荷持を歸し、越中城端に返る荷持を雇ふ。五箇山を往來する荷持はボツカと云ふ。歩荷の音なるべし。木曾などにては持子と云ふなり。ベースボールの棒に撞木を取附けたやうなる短き息杖を携ふ。

庄川の左の岸を下り行く。姫子松多くなり、次で赤松も段々見え始む。赤松の林を隔てたる庄川の急流は全く唐畫の趣あり。上流には盛なりし藤躑躅、下流にては早悉く散りて、谷うつぎ花盛りなり。

道の側の叢に藁が鳴く。所謂谷ぐくなるものか。其聲時鳥河鹿などの類にて、節は谷水の音にまぎれず。

椿原邊より對岸は既に越中にて、處々に籠渡あり。國境の境川より五六町こなた、小白川と

いと七八戸の村あり。村に寺あり。軒に釣鐘を釣りたる外、たゞの百姓家とかはらず。住持も經を讀まず。村のはづれに日本最小の小學校あり。

赤尾の町と云ふ山村より、雨烈しくなる。尾瀬峠を越す、中腹に雪多く、一重の椿咲けり。

城端は機の聲の町なり。寺々は本堂の扉を開き、聴聞の男女傘を連れ、市に立ちて甘藷の苗賣る者多し。麻の暖簾京めきたり。

汽車にて加賀の金澤まで来て寝たり、今日の旅、草鞋十一里。

六月六日、晴。

疲れたれば寝轉びて物を書く。

夜は按摩の老人を引留めて、遅くまで白山の話を見せて聴く。

六月七日、雨。

此町に一人在りし友人、この四月に逝せたり。朝起きて枕上にこのことを思ふ。腹を損じたれば能登の和倉へ寝にゆく。

七尾に牛馬の共進會ありとて、多く若き駒を曳く。土地の人荒き馬をよるこび、麥酒などを飲ませる者あり。女子供の馬を怖るゝこと鬼の如し。

能登の茅屋は笹の葉を交せて葺けり。古き屋根には黄なる花の苔簇生ぜり。

能登島は平遠にして、麥畠の色青く黄に、織物を見るやうなり。能登一國も太古は島なりしか。國府の平野は一帶は海よりいくらかも高からず。

六月八日、雲多く日影淡し。

湯宿の奥の間に終日臥す。オスカア・ワイルドの『奥方の扇』とアーネストとを讀了んる。若き女枕元に來て、頻りに大聖寺の話をしたり。

六月九日、大雨、風冷かなり。

朝船にて七尾の港に歸る。海岸はすべて赤土の崖なり。日本海は潮差少なければ、浸蝕の痕波の上に美しき線を作せり。

津幡にて乗換を待つ間、北海に渡る漁夫の群に交りたり。數百の荒くれ者の中に、老人女な

ども見ゆ。送りに來たる者十五六人、プラットホームに残る。髪の毛の詰り、眼を病める男の兒を負ひて立てり。泣くなら己ばかり父と一緒に行くぞと云へば、兒は母の詰り毛を引きて猶泣く。又や、清げなる女の、徒跣にて一抱へも有る薬罐を下けたるあり。やがて汽車の中なる男にそれを渡して物を言ふ。鉢巻をしたる老人、元氣さうなことをいひて大きな唾を吐く。労働者の聲は皆すこし噎れたるやうに聞ゆ。

富山に着く頃雨やみたり。立山は此より見えざれど、四山は凡て雪を戴けり。

六月十日、晴れて涼し。

監獄に行きて見る。女囚は二十人ばかりありて絹を織る。禿げて頭に一本も毛なき老婆あり。女囚の顔は凡て神妙にて、悪人とは見えぬ。後に聞けば出口より三番目のは、男を川へ突落して金を奪ひたりし女なり。

六月十一日、朝は曇る、今日入梅。

汽車にて新川郡に入る。名の如く大方は川床より成りたる平地なり。東に行く程づゝ少しく

傾斜あり。石川の川上遙かに山見ゆ。

滑川の濱より高志丸を見にゆく。若き練習生を乗せたる漁船なり。二三日の中に出帆してオツク海に鱈を釣りに行くなり。

魚津に着きて泊る。鯛の引網と蜃氣樓を見に日々數百の客あり。蜃氣樓は今日は見えぬ。詳しく話を聞くに、我がかねて夢想せしものほどは美しからず、いづれギジ・ンなれば見ぬもよし。

六月十二日、晴。

此町にても亡友の家の前を過ぐ。格子の隙より夫人の後影見ゆ。

三日市を過ぎ、愛本の橋より右に折れ、黒部川の岸を上る。山を崩し石灰を焼く煙、狭き谷に満つ、村の名は内山と云ふ。此奥信濃の境まで村なし。林道を開きて北城に出づ。路上温泉三所あり。

黒部川水濁りて白緑の色なり。川の中洲に處々廣き茱萸ぐまの林あり。此林の色と今日の水の色

とよく似たり。

残雪は山の塵を被ぎて、近よるまでは見えす。奥に入れば林は黒けれど檜は見えす。名物の黒部杉、姫子松。ナラにて櫓を作り、女ども負ひて山を下る。

黒灘の温泉に入りて宿す。巖の下に薬師の堂あり。川音の間に、折々伏鉦の音まじりて聞え來る。

六月十三日、晴。

今朝も猶川上に上る。出平の小屋に憩ひしに、よき猿の皮を敷きたり。猿の話聞く。夏は樹深ければ唯聲のみを聞けど、秋になればよく群を爲して往來するを見る。稀には孤猿あり。一旦群を離るれば友と食物を分つの煩累も無き故、自然に厭世になるなり。其代りには常に他の群より迫害せらるゝよし。

原の路を引返す、路上に樹を焚く少年あり。鍛冶の炭を製するなり。

愛本の橋本にてマキを食ふ、笹の葉に包める團子のことなり。

舟見は靜かなる町、廣き道少しく坂になり、正面に雪の山高し。艾もをきを作るとて門毎に蓬を乾す。

泊の町に入り海邊に出でゝ見る。淋しき濱に舟二つ繋り、女ども灰石を荷ひ出せり。東はやがて越後の境に近く、赤土の山を切開き、松の間に電柱の列ねたるは、昔義仲が越え來りし宮崎の鼻にて、其名も悲しき親不知の荒磯へは、此道を行くなり。

歌と云ふうまやはいづこ宮崎のみさきのをちはたゞ青き海

(明治四十二年十一月、文章世界)

佐渡一巡記

古い佐渡の旅行の忘れ残りを、今度入用があるので試みに書きつけて見る。忘れから此島ももう大分變つた様子だが、それをもう一度見に行つた後では、この記念すべき最初の印象が、消えてしまひさうなのが惜しいのである。

それにしても餘りに古くなり過ぎた。私が新潟から兩津の港へ渡つたのは、今から十二年前の六月の十六日であつた。ちようど梅雨のかゝりで、日本海の空は白く曇り、靜かな大きいうねりがあつて、雨が少しづゝ降つて居た。それでも船はさう揺れないでしつとりと氣分が落付き、よい季節に來たものだと思はずに居られなかつた。姫崎の鼻をかはらうとする時に、先づ眼に入つたのは一帶の竹の山で、信越では見られない明るい風景であつた。島の東向きが殊に

竹山によいといふことで、頂上に近い處まで伐開いて竹を植ゑ、それを盛んに北の縣へ供給して居る。四年から八年までの間に一度づゝ伐るといふ。

兩尾の宇賀神山には今でも毎月二十四日に、龍燈が上るといふ話であつた。それを話してくれたのは甲斐といふ郡會議員の政友會員で、支部の大會に出席した歸りと言つた。それが音羽の池の故事などを詳しく知つて居るだけで無く、包みから數多くの歌の短冊の、近頃書いて貰つて來たのを出して見せたりした。佐渡にはあの頃まではまだ斯ういふ人が居たのである。

夷は見た所まことに簡明な湊であつた。所謂兩津を繋ぐ湖水尻の石橋の袂に、税關の見張所も有れば大きな松もあり、たしか其樹の下に一つの平石が置かれてあつて、昨日の祭禮の御旅所にもなつて居た。この町の祭は新曆六月の十五十六日で、ちようど偶然に私は來合せたのであつた。宿をきめると早速見物に取りかゝる。馬に騎つた鼻高童子の人形を、車に載せて曳いて行く。信州と同様に舟の形をした飾りものもあつて、それにも亦下に小さな車が附いて居る。同じ行列の鬼太鼓といふものも見た。髪は能の狸々のやうに長く垂れ、面は仲々の上作と思

はれた。撥の持ち方に特色がある。一方の手に二本とも持つことが折々あつて、其ポーズがよほど蘭陵王の舞の繪に似て居た。それから夜に入つて、笛の音をたよりに尋ねて行くと、吾妻樓といふ貸座敷の奥の間で御神樂がある。それを格子の外から町の人と共に覗いて見る。舞つて居る神子は神主殿の細君のよし。その笛の音も能のものと同く似て居る。舞の後で法螺貝を吹いたのは全く珍しい。此土地には山臥から神主になつた者が一人有る。多分は其神主でせうと、是はその晩の按摩の説である。

翌日も他に用が無いから、何べんも町をあるいて見た。湊の町の海の側の家は、家作りが皆よく似て居る。大抵は二階家で何れも表間口が狭いのに、一間幅の土間を街道から濱まで突進して居る。土間には軒竝から一間ばかり引込めて入口の戸を附け、其横手からも店の間へ上れるやうにしてある。奥行は途方も無く長く、濱へ段々下りに續いて居ると見えて、暗い家の中を覗いて見ると、土間の行止りに青い海がちらりと、どの家からも見える様になつて居る。海に面する一區劃は物置に使つて居るらしいが、元は冬分の舟倉であつたらうかと思ふ。現に夷

の方では今も此部分に舟を引入れてある家を多く見た。是が水面のやゝ淋しく見える原因のやうであつた。能登の東濱の村々にも、斯うして住宅と舟置場の繋がつて居る建物は幾らもある。

三十七八年前に加賀の俱利伽羅附近から、移住して来たといふ老人と、路をあるきながら話をして見た。今は水津すゐつに住んで農と土方とを兼業にして居るといふ。金山かなやまにはたゞ一年餘りしか居なかつたといふ。島へ来て氣がつくのは、旅商人の少ないことであつた。今日は祭の休み日だといふのに、香具師ほし店の類が、一向にそこらを立廻らない。是はわざ／＼渡つて來る者が少なく、土地にはまださういふことをする者が多く無いからであらう。

濱へ出て見ると小舟が一艘鷺崎へ歸つて行かうとして居る。ふいと便船をして行つて見る氣になつて、慌てゝ支度をして大きな荷物を持込んだのが、後で非常に厄介なものになつてしまつた。舟には五六人の老若男女が乗つて居た。何れも親類うちらしく仲よく物を食べ、又色色の話を聽かせてくれたが、もうすっかり忘れてしまつた。舟は古風に地方ちかたに沿うて走つた。

あの頃はまだ珍しい小形の發動船である。丘陵が海に迫つて草花が多く、里の森は色が美しく、民家はそれに隠れて澤山有るやうには見えない。松島辨天岩などゝいふあたりは殊に百合の花が目についた。それから少し手前の北小浦きたこらうのあたりが、陸もひどい難處で冬分は全く交通が絶えるといふことであつた。鷺崎は至つて靜かな澗たにであつた。水草が茂り其水に夕日がさし込んで居る。何艘かの帆前船が岸からずつと離れて碇泊して居る。新潟から米を積みにやつて來た船だといふ。宿は木村といふ舊家で物持、舟で親切にしてくれた人たちも皆この一家の者らしかつた。

あくれば六月の十八日、外海府そとかいふ一見の旅途に上つた。南濱の赤玉村から來た島道者五人、濱尾源一・市橋富士太郎・菊地幸藏・山本紋十郎・白杵晋藏、進んで荷物を引受けてくれ、又忽ちに別懇の間柄になつた。此中では濱尾君少しく文字あり、菊池市橋の二君が稍年長であつた。互に苗字を呼び合つて居るのが面白い。赤玉は今岩首村の一大字で、古來赤玉を産する故に此名がある。古いものは瑪瑙のやうな品がある。今も其石の屑を萬年青の鉢などに入れる爲に、

一升何程といふ値で賣るさうである。越後と向き合つた農主漁従の村で、水津から近く五十戸ほどの家数であるといふ。一度是非行く筈になつて居て、まだ約束を果すことが出来ない。

今日は佳い色をして居るが、外海府も此邊の海は實に荒いのださうである。それ故に屢々海難の慘話がある。矢崎の岡を越えると濱は其北を向いて居て、そこには白塗りの小舟が一つと潜水服の乾してあるのが目に著いた。是だけが新らしい文明色であるといふことは、むしろ荒濱の淋しさを加へるやうにも感じられた。

佐渡にはホイトといふ者が土著して居る。兩津の南端の住吉社の傍に十數戸、其他にも相川にもとは二十戸、河原田に十何戸、小倉にも赤泊の柳澤邊にも若干居た。ホイトの四十八職といふ諺も傳はつて居る。現在は鑄物師いもじ即ち鑄懸屋、蝙蝠傘の直し、屑物買ひなどをするが、その鑄物師も古くからの商賣のうちではなかつた。又正月の春駒にも出たといふことである。昔はつゞれを着て一見して普通の農民と見分けることが出来るやうになつて居たが、今では却つてホイトの方が好いなりをして居るといふ。此日我々が彈崎はじききの燈臺の入口で、すれちがつ

た四人づれなどは、その三人までが襟に會社の名を染抜いた絆纏を着て、職工のやうな風采をして居たが、それを赤玉の人たちは一見して、すぐに氣が付いてホイトだと囁いた。しかもこんちはなどゝ聲を掛けて別れて、さまで輕しめる様な風は見えなかつたのである。

どうしてホイトだといふことが判るのかと訊いて見ると、是には明瞭に答へることが出来なかつた。しかし少なくとも一つの特徴は淺葱色の風呂敷を筒に縫つて、その中程を綴ちて袋にしたのを、携へて居るから知れると言つた。即ち芝居に出て来る武者修行の旅人などが、肩から斜めに負うて居ると同じいのを、佐渡のホイトは今でもまだ使用して居るのである。其名を何といふかは誰に聞いても知れなかつた。關東東海では一種の漂泊者、我々がサンカと呼び又箕直みなほしなどゝ謂ふ人々が、スマブクロといふものを持つて居ることはよく聞く話である。是は形が三角なものだなどゝいふ人があつて、私はまだ氣をとめて見たことはないが、それも或は同系統の製式では無かつたかと思ふ。

兩津の南はづれの住吉社の脇に住む者は、普通スミヨシで知られて居るがやはり亦ホイトで

あつた。此中には物持があつて、たしか名を半兵衛といつて金を貸した。スミヨシの金を借ると縁起がよいと謂つて、今でもまだ借る人があるといふのは縁喜の爲かどうか、但しこの話は後で聞いたのだから間違つて居るかも知れない。

それよりも強く記憶に印せられて居るのは、この晴れたる午前の外海府の風光であつた。彈崎の燈臺を出てから、眞更川まさらがはの村に取付くまでの間、海端うみはたに平地があつて大きな阪も無く、磯や砂濱の美しい變化は、一步毎に濃かになつて行くやうに思はれた。それで居て路傍に人家といふものが殆ど無い。出逢ふのはたゞ牛ばかりであつた。ちようど野草の最も花の多い季節で天然の秩序とも名付くべきものが、まだ此あたりではよく保たれて居るやうな氣がした。たとへば大野龜の鼻につゞいた一つの小川では、麓から頂上まで萱草くわんそうの花一色で、飾り立てたやうな景色を見た。そこへ行くまでも濱には蕪うの如き草の一面に、紅い花を咲いて居る處が方々に有り、見馴れて居るたゞの草花でも、大抵は二町三町の廣い面積を、他の草を交へずに連なり咲いて居るのが奇觀であつた。さうして花の色が一様に極めて鮮明であり、中には又香りの

高い白い花などもあつたが、名を問ふことが出来ぬので本當にたより無かつた。玫瑰ばななの花はまあ少し早いやうで、稀にしか見られなかつた。蔓荊はまばらは既に路の傍にも咲いて居た。

願ねがひの塞さいの河原は鳥巡禮の人たちが、殊に心を留めて拜んで行く靈場であつた。以前は西北を口にした深い岩窟であつたかと思はれるが、いつの世かの風浪にその後の山が崩れて、今に行抜けになつて、わざ／＼その中を通るやうに路が出来て居る。前には地藏堂を建て、大小無数の石佛が、穴の内外に起臥して居る。石を積む風習はこゝにも盛んに行はれて居るらしいが、それは皆旅する者の道心からであつて、あたりは廣い間一軒も人家が無い。是が中古の葬地の跡であつたらしいことは、其後他の地方の例を比べて追々に判つて來たのだが、島の人たちにはまださうは考へられず、半ばあの世のやうな信仰を以て眺められて居るのである。

鵜嶋うのしまは最初に目にかゝつたなつかしい人里であつた。是から又一つの岡を越えて、漸く眞更川の村には入つて行くのである。佐渡の名物の「のぼり木戸」といふものが、此邊では幾つか見られる。牛の牧場と畠場とを區劃する爲に、高い石垣を設けて旅人がそれを越えるやうにな

つて居る。眞更川は光明佛寺に登つて行く山の口である爲に、是も島めぐりをする人にはよく知られ、村は高地に在つて構造がやゝ他と異つて居る。私たちが晝休みを頼んだ一軒の農家などは、床が高く入口に廣い土間があつて、建て方が津輕などゝ似て居たが、他の家々はどうであつたか比べて見なかつた。靜かにして居ると村の人の色々の物言ひが聞えて来る。後鄰の家の老女がオチャーと聲高く呼んだ時に、返事したのは若い娘であつた。足利期の記録によく出て居る阿茶の局、もしくは茶々といふ男女の童名なども、本來は稚兒が人を喚ぶ聲から出たもので、さても國々で父をチャンと謂ひ、母をチャチャなどゝいふのも起源は一つであらうといふことが、此時に始めて心付かれたのである。

外海府の村々は少なくとも現在の状態では漁村で無い。村に田の多いことは却つて上の方に越えて来る。海から望んだならばよくわかることゝ思ふが、この邊は海沿ひの臺地がよく發達し、それが磯に向つて絶壁をなして居る。たゞ其一部だけが洶らされて僅かな濱を作り、或は山水を誘うて深い澤を刻み、そこに登り降りの苦しい阪が出来たのである。村はこの僅かな浦の

低地に固まつて居る故に、外形は一個の漁村のやうにも見えるが、後の岡の上に登ればこの弘い田地があるので、それも排水がよい爲に良質の米を産し、今では島で重要な米どころに算へられて居るのである。

この海岸の臺地はずつと南に續いて、金を産する相川の後の山までが、同じ高さであるやうに私には思はれた。勿論南へ行くほど濱沿ひの低地部は多くなり、山が深くなるほどづゝ川の水は豊かになつて、所謂デンヂは其兩岸に拓かれて居るのだが、尙何度と無く海に迫つた磯山を越えて、次の村へ下つて行かねばならぬことは、伊豆の西濱や天草下島も同じであつた。眞更川を出てから笠取峠といふのが、新道でも可なり険しい山路であつた。光明佛の山から出る一つの山川を、やゝ上流に溯つて渡ることになつて居るので、急に山の中のやうな氣分になる。石楠の花なども咲いて居ると見えて、折取つたばかりの一枝が路上に棄てゝあつた。それから濱傳ひに岩谷口の村まで出て来ると、爰はもう農村であつて家のまはりに田が有る

赤玉の五人は重い私の荷物を持ちながら、始終面白い話ばかりしてあるいて居る。是は菊地

君の話の後から私が聴取つたのだが、佐渡では佛堂の守りをする道心者をロウソウと謂ふらしい。これは老僧では無くて濫僧と書いた古語であらうと思ふ。むかし或家の門に立つて、ロウソウが物を乞ふた。斯ういふ人の中には時々偉い人が姿をかへて御出でることがある。粗末にしてはならぬといふと、忽ちいゝ氣になつて「大師あらはれたり」と謂つた。傍の一人が何をこいつが言ふぞ、貴様は何村とかのロウソウぢや無いかと叱りつけると、ぬからぬ顔をして「又大師あらはれたり」と謂つたといふ話。是は弘法大師の石芋や喰はずの梨、又は杖立清水の傳説の分布、今でも旅僧がやつれたる姿をして、村々を巡つて人の心を試みてゐるといふ信仰の久しい歴史を考へて見ようとする者ならば、耳を傾けずには居られない奇聞であつた。元は江戸あたりの小咄から出たのかも知れぬが、それを離れ島の浦人が學び知り、又その可笑味を解して居るといふのは、何か隠れたる力があつたことと思ふ。佐渡は斯ういふ類のにせ者のどこよりも多く寄つて來る土地である爲に、自然に其間にせり合ひが起つたのでは無いかと考へて見た。

けふは舊曆の五月の節供であつた。遠近の家で餅をつく音がする。その音がトトトンといふ三つ拍子で、我々の横杵に比べると著しく間が細かい。或はまだ手杵を用ゐて居るのでは無いかと思つて、氣を付けて居たが覗いて見ることが出来なかつた。此あたりには榭かしはの樹が多く、何れも日にかゞやいて伸びくゞと茂つて居る。その榭の葉の色と餅臼の音とだけで、私の五月節供はすませてしまはなければならなかつた。

關村矢柄村。若木氏の集めた佐渡の民謡で、前から聽いて居た地名である。「生れ在所さいしよならなつかしや」といふ歌なども思ひ出した。關には膳棚と稱して磯端には珍らしい平岩が連なつて居る。山からは木の葉石も出るといふことだが、少しも休まず通り過ぎてしまつた。佐渡には近頃まで村での出來事を、歌にうたつて盆踊に踊る風習があつたので、斯うした一人の初旅でも思ひ出すことが多い。

達者の傳次が焼けた

海豚殺したその罰で

といふ一章などは、今でも海豚を見又は話を聞きたびに、一度でも聯想を馳せなかつたことが無い。海豚が寺詣りに來るといふ話はこの島にもあつた。もつと詳しく尋ねて見たいと思つて居る。達者といふのは姫津の南に在る入江であつたが、もう此邊にはさういふ話も無さうである。

石名の檀持山清水寺の、名木の二本の鴨脚いんげんは見ごとなものであつた。此邊の家作りを見て行くと、板葺きも草屋も大小によらず、多くは三つ割式で中央の一間には、表口が一杯に開いて爐が有るらしく、一方は出居でいの間他の一方は勝手に、奥の寢所はまだ押入れ同然の附屬物であるやうに見えた。日向の椎葉山村しほばで見えて來たものと、構造の似て居るのがよく目に著いた。多分は主屋おもやと左右の客舎きやくしゃと竈屋かまやと、三つが別棟であつたものを一つ棟木の下に、寄せ合せた名残であらう。外見がやゝ低く見える爲か、二階を作り添へることが此頃は流行して居る。

小田の某氏は此邊きつての物持で、屋敷も高く家つきも立派に見えたが、是はたつた三代で作り上げた身上で、無理なことをして溜めた金ださうなと同行者は謂つて居た。大倉の平三は

此邊での舊家で、梶原平三の護持佛といふのを村に祀り、家には又古い武具類を持傳へて居る。大きな門が田の真中にあつて塙は無く、其田と家との間を旅人が通り抜けるやうになつて居る。家の障子はすべて清書の紙で貼つてある。質素なものである。しかも鷺崎の木村さんもこゝと縁續きだといふことまで、始めて來る道者たちがもうちやんと知つて居るのである。

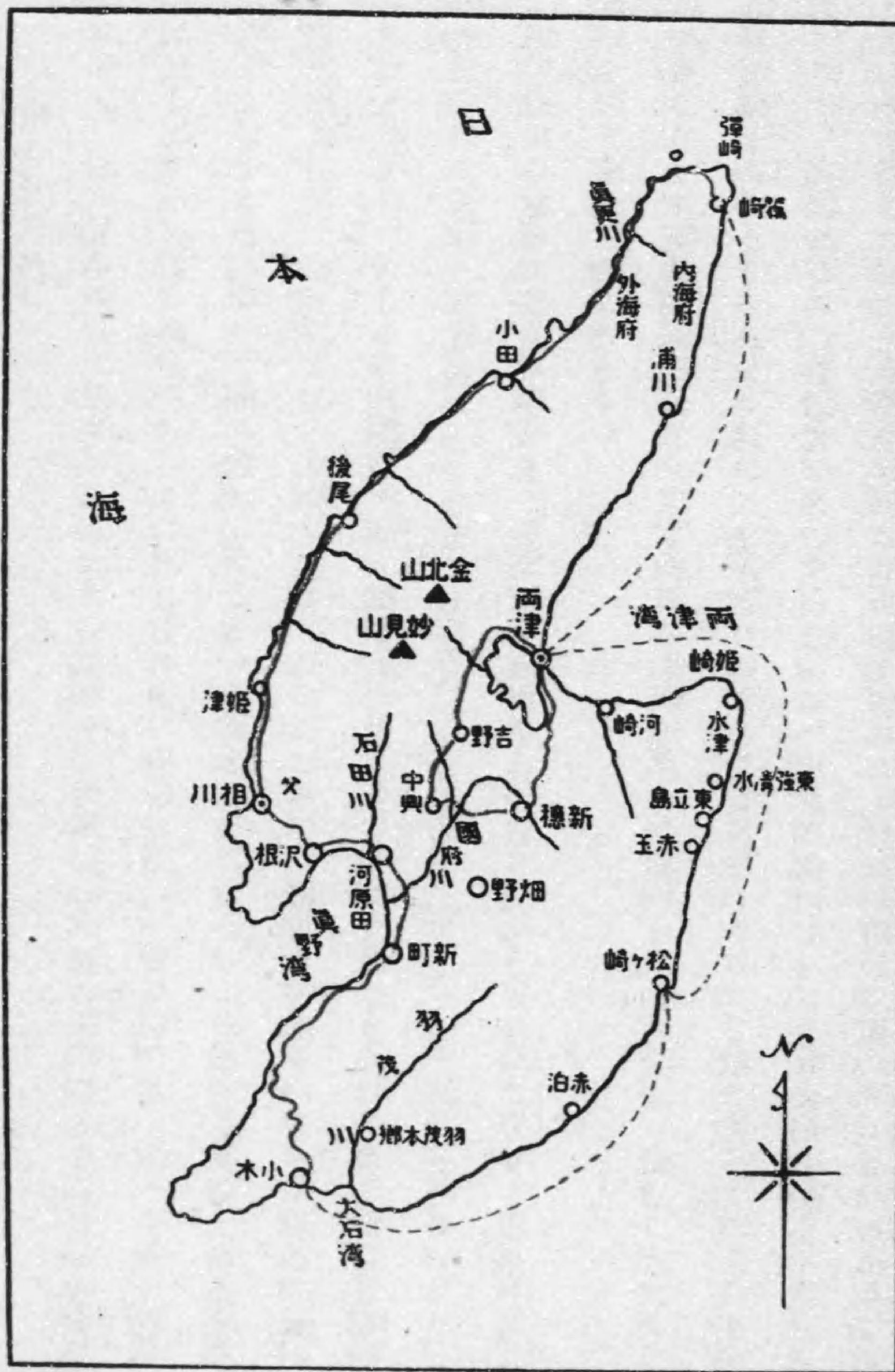
入川いりがはの村に一泊する。此村の舊家の服部氏、つい數月前から宿屋を始めたといつて、家の作りは全く昔のまゝで、食物だけが當世の旅館ぶりであつた。こゝへ泊つて行くのだと意氣込んで入つて行つた一人が、何か挨拶が出来そこなつたとかでさア事をした。是では入れなくなつたと言つて自分だけを残して、他の小家に行つて宿をとつてしまつた。しかも翌日の朝は作り聲をして、別の人になつて私を誘ひに來てくれたのは、どこまでも親切な島の人の心持であつた。

入川村の氏神は寶生神社、祭神は木花開耶媛命であるが、祭禮の日には他の村でも同様な相撲がある。近いうちにもどこかの郷社の祭があるさうで、其村角力の廣告がそちこちの辻に掲

げられて居る。村には代々の關取の通り名があつて、其名を有望な青年に相續させて居る。之を代表者として村どうしの勝負を競ふことは、此節の選手制度も同じことで、どこへ行つても人が相撲の話ばかりして居る。奥州會津の新宮權現の相撲は、たしか新葉記にも見えて居た例であつた。是も村々の關の名が定まつて居て、昨年の最手^{まて}を能力と呼んで居た。江戸でも國々の力士が各々同郷の支援者を有し、片屋は有つても其最負が個人的のものであつたのは、原因が是から出て居るかと思ふ。だから村々の花相撲が衰へてしまふと、第一によい力士を見つけることがむつかしくなつて來るのかと思はれる。

片邊川の川口では、網を張つて鱒を捕つて居た。此川上は二里位までは捕れるので、山の中に小屋を掛けて漁をする者が今でもあるといふ。

姫津は町の瓦屋根を、高い處から見ても通り過ぎてしまつた。昔は相川專屬の湊であつて、下關大阪との交通が繁く、越後とは殆ど取引をして居なかつた。汽船が始まつてから道路は全く變つたが、それでも大きな漁業権があつて農を頼りにせずとも榮えて行くことが出來たのであ



佐渡一巡記 大正九年六月

つた。今ではさうばかりも謂つて居られぬ様子である。以前は相川の南のドロとかいふ處に住んで居て、純然たる海の移住者であつたらしいが、陸地に馴れると生活が少しづつ變つて來る。相川の海士町あまきなどもそれより新しい土著者であるが、埋立が出来てから海に遠くなり、もはやかつぎなどをする者は居らぬさうだ。内外の海府が追々に農村となつたのも、恐らくは又同じ過程を経て來たものであらう。

相川銀山の繁昌は慶長に始まり、正保頃が絶頂であつたらうかと言はれて居る。正保から元祿までの間に此町の寺の潰れたものが、其跡の分明なものだけでも四十五箇寺あるなど、舊記にはあるから、たしかに其頃の方が人間は多かつたのである。しかもその一旦の殷富を維持して居た支柱が、折を見ては一本づゝ抜けて行つたのみで、都會といふものはさう急速に衰へて行くものでも無かつた。寧ろ前から在るものを何とかして保存しようとする點に、榮える町では見られない一種の物なつかしさを感じられる。相川の後の一帯の岡では、樹々の緑が海に光に映じ、鶯が終日啼いて居て、底は此世の地獄とまで歌はれた何百年來の人事の葛藤が籠め

られて居るものとはどうしても思へなかつた。旅館高田屋の横町から山手に登つて行く小路は多分金山かねやまに働く人たちの出入口であらう。宵から朝方まで始終二三人づゝの足音と話聲が、ぼそ／＼と枕元へ聴えて来る。それが夢うつゝの堺で、何か此土地の長い昔語りを、聴いてでも居るやうな気がしたのであつた。

こゝから私は又一人になつて、車を雇うて澤根・河原田・新町などを走り過ぎた。此邊の見聞は後に多くの紀行類を讀んだ爲に、印象がどつたになつてどれ迄が自分のものだか分らなくなつた。格別又附加へて見ようと思ふことも無い。それから田切須たぎりす・西三川・高崎、小比叡、海と村里との變化の多い風景だけは目に残つて居る。小木こぎに入つて新築したばかりの喜八屋といふに泊つた。建て直してもやつぱり昔風に、まん中の廣間を打通して、二階の客室を周圍だけに設けてあるのが嬉しかつた。是は大きな家族の寢所から發達したもろしく、其後も奥羽の旅行では折々之を見たが、圖でも添へないとそれを詳しく説くことは出来ない。宿屋が亭主の名を屋號のやうに使つて居るのは珍しいが、是も伊香保や瀬見の温泉、伊勢の御師などにも

似た例はある。東北ではそれが一轉して、今では苗字と通稱との半分づゝを連ねたものが行はれて居る。

六月二十一日の朝早く小木を立つて、發動船で松ヶ崎へ渡つた。そこで小さな和船に二人の船頭を雇つて、磯まはりを夷まで漕がせたが、潮が悪いので舟が少しも進まず退屈してしまつた。色々話をしてくれたやうであつたが、今はもう殆ど覚えて居らぬ。

地圖を見て居て氣が付いたことだが、佐渡には同じ村の名の二つあるものが多い。それを大抵は方角などで區別して居る。松ヶ崎の東の東強清水ひがしとほしみづもその一例で、此地は久知村の八幡様が始めて御上陸なされた故迹と傳へ、御造營の場合は申すに及ばず、毎年の祭にも爰から出て行つて、参列するのが嘉例になつて居た。何でもさういふ名の靈泉があるらしく、強清水といふのも何か神祭りかみまつりと關係のある言葉かと思はれた。久知の長安寺といふのは昔から有名な寺で、珍しい言ひ傳へが數々あるといふ。

赤玉の村の沖を通る頃には、もう長い日も黄昏に近くなつて居た。よつぽど爰から上つて水

津にでも泊らうかと思つたが、やはり荷物が有る爲に決心がつきかね、其まゝ舟の中に寝轉んで夜の海を渡り、月も隠れてしまつてから漸く兩津の港に戻つて來た。

その翌日は國中の見物に出かけた。中興の川邊氏は兄の知人であるので、訪ねて行つて土地の話聞いた。此邊で最も古いといふ民家を、見せてやらうと言つて案内せられる。三間一尺梁といふ言葉があるといふが、私には其意味が呑込めなかつた。現在はおほむね四間になつたといふのは、縁側の附いたことをいふのだと言つた。オエ即ち板敷になつた部分は、私の想像の通り二つに區劃せられ、土間を加へて三つ割になつて居るのである。その中央の間の突當りは寢部屋であつた。親隠しといふ名は知らなかつたが、耻隠しの語はまだ記憶する人がある。寢所に藁を使ふからさういふので、揚げ敷居と稱して敷居を何寸か高くするのも、其寢藁が外へこぼれ出す見苦しさを防ぐ爲かと思はれた。寢部屋の入口が此家では板戸半間で、他の半間は浅い物置きになつて居た。

風呂桶に藁で編んだ天蓋の様な蓋のあるのも、私には全く新らしい見學であつた。桶は平日は土間の隅などに轉がして置き、湯をわかす時ばかり上り段の端まで運んで來る。藁の天蓋はちようど其上に繩でつるしてあるので、之を覆うて湯氣を籠らしめ、其中にしやがんで蒸されるのである。湯の量は僅かで最も熱く、それを時々釜から汲出してさし加へる。足を焼かぬ爲に底に踏臺がある。子供がいゝ心持に中で居睡りをして居るのを知らずに、熱湯をさして火傷をさせたといふ話もある。後にこの附近を旅行した人の話をきくと、新穂では宿屋でも此式の風呂を見た。但し蓋だけは木製の箱であつて、たとへば長火鉢の助炭の如く、一面を引戸にしてあつたといふから、中世の蒸風呂の簡略なものであることがわかる。京都でも戸棚と風呂とを間ちがへた昔話がある。北國では今でも戸棚をばフロと謂つて居る。

國中にはカノエ塚といふ石塔や塚が多く、今でも折々は新たに之を立てることがある。庚申とは關係が無いと見えて、毎月朔日とかに祭をするといふ者があつた。又石塔の表に大きな梵字を刻したものが念佛塔であることは、關東の板碑時代も異なる所は無い。日蓮親鸞の遺跡ばかり多い處かと思ふと、古い眞言念佛の名残もまだ全く消えてしまつては居ない。

此地に茅原鐵藏老といふ古い「郷土研究」の寄書家があつて、大悦びで尋ねて来てくれた。むつかしい原稿を書く人で、いつも編輯者を難澁させ、それを意を掬んで書き直すと、折々違つて居たといふ小言が来る。よつほどわからぬ人だらうと思つて居ると、逢つて見れば大ちがひで、七十幾つだといふのに壯年の如く、はき／＼と物を言ふ人であつた。相手の抱いて居る随分込入つた不審を、簡単な問ひの言葉の裏に覺つて、その無い返答をするだけの明敏さを持つて居る。斯ういふ前世紀教育の完成した人から、文書の採集ばかりを續けて居たのは損失であつた。もう少し此方から出て行つて、口で教へて貰はねばならなかつたのである。しかも私たちの旅で逢ふ人といへば、普通は手紙でも用の足りるやうな人ばかりで、従うて無用な辭令を交換して、別れてしまふやうな場合が多い。遭遇は決して容易では無いと思つた。

佐渡へ来た以上は誰でも見物に行かぬ者は無いといふ場處を、十箇處ほど教へてもらつて、私は皆殘して来た。誰かゞ觀察して置いてくれるならば、私などは其教を受けた方がよい。それでも一人だけならうそを教へられるかも知らぬが、多勢の記録があれば比べて見て樂に眞

實がわかるだらう。誰もが省みなかつた處にこそ、我々の知りたい事實は遺つて居る。旅の學問には人の顔、何でも無い物ごし物いひなどが、本に書いて無いから自分で行つて經驗しなければならぬ。相川や夷などで在ざいから出て来る物賣りは、通りに荷を卸して立つて居る様子が、何だか少し變つて居ると思つて見ると、多くは人家には背を向けて、町を通る人に賣つて居るのだ。買ふ者も半分は近所の住民で無く、わざ／＼買物に出たのかどうかは知らぬが、他處から来た人が多く見受けられた。立賣り町立ちといふ語は奥羽の方にもあるから、あちらの人は珍しくも無いであらうが、少なくとも關東から西にはもう滅多に此光景は見られない。それほど町といふものが、もう文字通りの市になつて居るのである。

再び海上が至極穩かで、次の日の午後には又新潟に戻つて来て居た。早速縣の圖書館に出かけて、山中樵氏に頼んで佐渡の書物を見せてもらつた。相川縣史二十一冊、その第二卷の禁令編には、明治九年二月の相川縣權令達、「自今可改箇條」といふものが出て居る。紙數は二十枚餘、四十四五年後の現在と比べて、風俗の推移を見るに便が多い。其中には寢部屋ねべの風、若い

衆仲間の慣習、又は結願とか功德とか謂つて、石塔をむやみに立てる弊害などが説いてあり又一方には其頃の二見港の、繁華の有様などがよく窺はれる。寫して置いてもよささうな本であつた。

それから古いものでは佐渡年代記十卷、慶長六年以後嘉永三年までの歴史、主として相川の事蹟を録して居るが、中には又西三川の金山や田切須の町の事も見えて居る。最も心を動かしたのは承應元年三月の小比叡騒動、辻藤左衛門が同僚の姦曲を見るに忍びず、之を弾劾しようとして却つて悪黨の爲に害に遭つた悲劇であつた。密書を携へて江戸に上つた使者が、海上難船してその屍骸が島に漂着し、書状は奸人の手に落ちて事露はれたといふ段などは、事實ではあらうが劇以上の効果である。それから父子主従合せて二十人、蓮華峯寺に楯籠つて焼討せられ、この結構の美を極めた伽藍が、一朝にして灰燼に委した話は、今讀んで見ても胸が躍るやうであつた。

佐渡志の卷五にはヤシホ即ち椰子の實の記事があつた。此物島の産に非ず、もろこし嶺南の

國々より出るものゝ漂ひ流れ来るを、海濱の民拾ひ得るなりとあつた。その海濱といふのは外海府でもあつたらうが、曾て之を手につけて珍重したのは何人であつたらうか。又其物は今はどうなつてしまつたか。我々の生活の可なり印象深い經驗にも、なほ斯うして痕跡を留めぬものが多いのである。

(昭和七年十月、旅と傳説)

佐渡の海府

地圖で見た佐渡の島は、牽牛花の二葉の形をして居る。その二葉には僅か大小があつて、外側の大佐渡の方が、峰も高く海岸線も幾分か長いやうである。越後の海府と對立する佐渡の海府は、昔はこの大佐渡の海岸の、略全部を包括したものかと思ふが、現在の内外海府二箇村の地域は、西北鷺崎の海角を中にして、十二三里の間に限られて居る。大字が十四で四百餘戸三千人ばかり、此に巡査が一人居る。冬分は折々杜絶するやうな交通状態である爲に、世間からは今なほ別天地の如く取扱はれて居る。自分は地名から推定し得る海部土著の北の限線として

越佐二國の海府の村々に、若干の生活上の特色を豫期して居たのであるが、今の處ではそれが空想であつたやうな感じがする。しかも歴史に見残された静かな外海岸の村組織には、兎に角に研究者を失望せしめぬだけの過去が潜むやうである。後の爲に小さな記録を作つて置かうと思ふ。

佐渡の文獻は必ずしも貧弱では無いが、惜しい哉いづれも二百年以降の集成で、しかも其大部分が國中の一盆地と相川とに限られて居る。相川當年の殷富は、爰に昌平文學の實生を成木せしむるに十分であつたが、根が江戸の統一思想から出て居るだけに、所謂郷土の英雄に對する敬意が足りなかつた。其結果は今日に至るまで、此島の歴史は殆ど流人の歴史である。中世の地頭が眼近く流人を監視したやうに、相川の風雅の士も、名所舊跡を一眸の下に纏めんとした姿がある。由緒を語るべき本間澁谷藍原等の一類は多くは他郷に去つた。聞書覺書などの頓と傳はらぬ國である。小佐渡の方には其でもまだ、若干の殺伐なる記録が有るが、海府に至つては史學者との交渉が殆ど無い。史料を文字以外に求めない限りは、恐らくは永く斯うであら

う。手短かに申せば此方面には、鬪諍と大きな訴訟とが會て無かつた。それをするやうな元氣な階級が来て住まなかつた。其故に欽明記の肅慎の隈の後、特筆大書するに足る事件が何も無かつた。即ち話にならなかつたのである。

二

此様な事件は實は無い方が結構だが、一つ困ることには海府の名を遺した漁人の部曲が、其後去つたか將た留まつて變じたかを、明瞭に決定することが容易で無い。然し兎も角も戰國の終の頃には、此等の村々は既に只の農村になつて居たらしい。越後の上杉景勝が一島を平定した時には、内海府即ち東南面の十數村は、吉住の本間氏と梅津の澁谷氏とで分ち領し、羽黒の澁谷氏は嶺を越えて、外海府の鵜島眞更川などを支配し、其他の諸村は石花の石花將監之を領して居た。石花氏は府中の本間殿の旗下であつた。蝸牛角上の争を事とした永い年月、外海府の山田の米も、やはり兵糧の用に供せられたのである。平野地方の旅人の眼には、不自然にも

思はれる肥料の運び方即ち、一桶づゝ汚い物を背に負うて山阪を登る風も、随分古くから必要になつて居たらしいのである。此點に於ては海に據つた島曲しままがの里でありながら、却つて越前西の谷などの山村と似た事をして居る。

海府は農村となるべき内外の事情を具へて居た。地貌の上から言へば、歩いて見ればすぐ分ることだが、佐渡島の周圍には一帯に海岸臺地が發達して居り、其が外海府に来て殊に著しい。高さは二百尺ほどであらうか。つまりは國中くになか即ち北南二嶺の中間に横はる平地の、夷港に接した最高部と、略同じ位の高さであつて、其原因がもし自分の想像の如く、島の土地の一般の隆起に在るものとすれば、其年代は大佐渡と小佐渡との、陸続きに爲つた時と同じ頃と謂ひ得る。特色のある海府の風景は、半分は是が原因を爲して居る。長汀曲浦の旅の目を怡ばしむべく、到る處に其高さの瀑布が有る。又我々が名づけて「島の極樂」と謂ふ絶壁が多い。島の極樂は或は曾て人間の地獄であつた。岡が崩れて眞直な岩を露し、久しい間に樹木が成長し花咲き、鳥をして快活に歌ひ且つ戀せしめて居る。斯ういふ崖の下を旅人は行くのである。瀧は只見るば

かりで、其水は多くは汚れて居る。村から村へ越える時によく知れるが、其水上は皆田の溝である。村の人々は何れも嶮峻な阪路を攀ちて、此岡の上の田を作るので、國府平野の二三大字を除けば、一戸當りの田地の廣いのは此邊だらうと思ふ。清水掛りで排水が十二分に良い爲か米の質も優良なものが多く、他村に供給する量も少なくないと云ふことである。

海から見たのみだから正確には知らぬが、熊野の南端にも佐渡とよく似たシーテレースが續いて居る。伊豆の西海岸でも松崎から土肥近くまで、同じやうな地形が見られるが、伊豆では村里も海岸より遠ざかり、田地のある平面に構へられたものが多かつたやうに記憶する。海府の村で一二の例外を除き、何れも渚に臨んで低く住み、時としては如何にも窮屈に通路も無くたて込んで居るのが、或は偶然に此等の里人の以前の境遇を語るものであるかも知れぬ。

三

併しながら住居の所在ばかりでは判断出来ぬ。自分の見た所では、少なくとも現在に於ては

半農半漁とまでも謂ひ難い。第一には浦に繋いだ船の数が少ない。漁業権は此島では概して沿海の村に割渡して居るが、住民は共同に又は平均に之を利用して居るのでは無い。肥料には海村だけに海の物を使ふらしい臭氣がするが、必要缺くべからざる程度では無いやうだ。要するに此だけの田地を經營するには、假令海に臨んで居ても、海へ出るだけの人手は剩りさうにも無い。其に又勞力利用の季節が重複する、田地が雪の下になる頃は海も荒い。折角冷たい水で採つた物も、運び出す方法が如何にも容易で無い。そこで考へると夏分灘の静かな頃に大いに稼ぐべき漁業と、米の栽培とは兩立せぬ筈である。従つて漸次に漁から農に、移るならば移つてしまふべき傾向がある。あまり農業的であるから海人の末ではあるまいとは言ひ難い。其斷定には今少しく別の材料が必要なやうである。

灌漑の自由な岡の上野が、農業への誘因であつたと同様に、一方では漁業からの壓迫も考へられぬことは無い。其一つは漁獲の減少である。佐渡は近世多量の海産物を出したことがあるが、其が世と共に次第に減じては居なかつたか。内海の四季間斷なき漁業地と異なり、一期間

の所得で年中の生活を支へねばならぬ所では、分けても豊富で無いと家計の不安を感じ易い。僻遠の地で水産を商品とする爲に、重要なものは鹽であるが、佐渡は製鹽に付いても一般北國の不便を免れ得なかつた上に、地形の然らしむる所鹽濱の地が多く無い。江戸時代には輸入を以つて補充をしたものか、調べて見たいと思ふが、少くとも僅か有つた製鹽地は先度の改正法律で罷められ、今日は遠國の鹽ばかり嘗めて居る。昔に於いても地方的に鹽が得られぬとすると、或季節に偏した大漁はやはりさほどの恩恵では無かつた。何れにしても餘程の政策が後援を與へぬ以上、漁業は土著當初の條件であつたとしても、村存續の單純なる基礎とはなり難いものゝやうである。

四

然らば其ほど無理な地方へ、海部が移住して來たと見るのが誤ではあるまいか。自分の推測は實は地名が元であつて、他は後に心付いた力の弱い考證であるが、陸人に比べて遙かに移住

心の旺な彼等である。現に近い國では越前丹生郡の海岸に、出雲から延びたらしい所謂ソリコが住み、能登西面の輪島には、海士町の部落があつて肥前の天草から來たと謂つて居る。佐渡でも相川の町の南端に海士町あり、町並が四十間軒、家数は二十戸足らず、天明初年の佐渡事略には、海士町は農業無し男女とも鮑あはじを採るとあり、外海府北端の願村ねむらですら九十餘石であつたのに、此村の草高は只の九斗五升である。相川から一里北の姫津村は、之に次で農業が少なかつた。今日は追々に耕地を買入れたやうだが、文化末年の佐渡志には、畑二町一反此高十五石三斗とあり、しかも大きな邑である。是と相川の子ととの關係はまだ知らぬが、元はやはり漁民として移住して來たものらしく、當初相川より少し南の、ドロと言ふ小さな濱に住み、姫津が相川の津になつて後、保護を與へて爰へ移したのもらしい。石見が本國と謂ふことで全村悉く石見氏である。漁業に關して他村の有せぬ特權を持つて居たのは、多分は其歴史を語るものである。併し要するに此等の移住民は相川開けて後のことで、しかも干鮑は長崎商賣の賣渡品と爲るよりも遙か以前から、此國重要物産の一として公にも認められて居た。小佐渡東端

の前の濱には鮑と謂ふ一村もあつて、是に基づいた地名と認められて居る。鮑ばかりは誰でも採ると云ふ譯には行かぬ。此のみでも海士部あまべの古くから居たことを證據立てるが、しかも其他も今では著しく産額が減じ、之を採るべく海に潜ぐる者は海士町にも最早居なくなつたやうである。さうして機會さへ與へられるならば、彼等はこの寒い國にでも、移つて來る勇氣を持つて居たのである。

五

併し又海府が此徒の故地であり、其住民が古の白水郎の子孫であると見るには、證據が乏しいばかりか反證に算ふべきものさへある。其第一に擧げねばならぬのは、所謂カネリ又はイタダキの風習の無いことである。此も職業と同じく變つたと謂はれぬのは、頭に物を載せることは何も漁業の勞務に限る理由が無いからで、殊に海府のやうに山阪の多く且つ急な處では、一層保存の必要があらうと思ふのに、自分が出遇つた婦人は、悉く東部日本一般の背負ひ方をし

て居り、又色々と尋ねて見たが元は頭に載せたと云ふ話は無かつた。尤も肥前平戸の家船かぶねの者などはもう此風を廢して居るやうだから、背負ふから海人で無いとも言はれぬかも知らぬが、兎に角には是は顯著な事實である。第二には言語風俗に、殆ど何等の特徴も無いことで、此も私には意外な経験であつた。家庭の生活に親しんで見たら、或は隠れたる差異を見出し得たかと思ふが、少なくとも旅人の耳には、サロノクニ一流の訛言は國中くになかも小佐渡も同じやうに聞えた。只注意すべきことには右のラ行と夕行との轉訛は、九州の南半に弘く行はれ、又豊後の海部などの中にも著しい。何か研究の端緒にはならぬかと思ふ。

言語などには細かに注意をしたら、海府特有と云ふべき若干を拾集し得るかも知れぬ。しかも其が海部なるが故に此の如く、他と異なつて居るとはどうしても断定し得られぬやうである。例へば此一帯の海村では、未婚の女子をオチャイと呼ぶやうである。關東ではネエヤとかアネコなど、謂ふのに相當する。オチャイは疑も無く足利時代の阿茶と同じもので、宮も藁屋も以前はこれで通用して居たものが、改良の必要も無くて此處だけに残つたのであらう。生活上の

慣習も亦この通りで、たま／＼他の村では之を笑ひもしくは珍重するほどに變化して居ても、其は單に偏卑の地が一種の保存場なることを意味するに止り、容易には此を海部史の資料と認められぬ。婦人の勞働者などで折々著て居るのを見た臂までの刺子袴纏きしこはつたんは(名も聞いたが忘れた)、今では恐らくは海府以外の地では見られまいが、此等は近い昔まで島民の一般に用ゐて居たものである。之に就てふと思ひ出したのは、曾て越前から美濃の根尾谷ねおだにへ越えた時に、根尾の宿を眼の下に見る岡の端の地藏堂に、常に幾つかの山袴が脱いで置かれるといふ話を聞いた。其は奥在所の女たちが市に出て来るのに、爰までは山村の風俗を保ち、町では笑ふから之を脱ぐので、自然に一つの境界線が出来たのである。處が那須から會津の方へ行けば、女でも平氣でまだモツペをはいて居る。新しい平地々方の流行でも、仕來りと便利とを征服するのは無造作で無い。種族の異同を見出す標準としては、今一段と古くから行はれ、しかも一段と自由に取捨し得た風習を求めねばならぬ。

建築などにも目に著く程の特徴は有つたが、是は殊に變化の階段が分るから、海府の今の様

式が佐渡一般の昔の形であることは推測し得られた。地割などの制肘の無い限は、茅葺の入母屋でも、板居の切妻でも、元は同じ建て方であつたものが、自然に些しづゝ新しい番匠の作略の加はつたことがよく知れる。さうして海府には比較的純な形が遺つたのである。即ち平入りひらいりの稍狭い間口を、正しく三つに切つて中央を公式の入口とし、多くは向つて左の一方を勝手口として居る。爐は中央の板敷の中程に在り、普通奥の間は僅かに寢所があるのみで、未だ所謂四間通りよまどほの住居には發達して居らぬ。是は恐くは岡に據り、南又は西に向いて家作りをする場合の、尤も自然な形であらう。自分が見た日向の山村でも、又相州津久井の奥でも此通りであつた。納戸の生活が其では如何にも陰鬱だから、必ず將來は急激に改められるだらうと思ふが今ならばまだ國中くになかの村々にも、右申す如き用心と禮儀とを主とした廣間ひろま、及び其後に隠れた最も謙遜なる帳臺の中世式を見ることが出来る。但し此建て方では板葺又は瓦葺の場合、殊に低くて外觀が見すばらしいので、近頃は盛んに二階作りにする風が行はれて居る。二階作りは勿論維新後の變化であらう。海府だけにはまだ一向に其變化が入つて居らぬので、注意して觀察

せぬと或は是も根本的特色に算へたくなるかも知れぬ。之を要するに中世以降の混淆であるか、はた又昔から同一の種屬であつたかは別の問題として、少なくとも近代の生活には完全なる同化があつた。其同化から更に發足した最近の進歩には、交通其他の事情から、多少の遲速が見られると云ふのみである。

六

考へて見れば何れの地方も同じことであるが、佐渡の如き手頃の一つの島に對して見ると、如何にして人が來て住み始めたかの問題が殊に考へられる。地方官の子孫などは流人の後裔も同様に、評判ほどは繁殖を助けて居らぬに相違ない。さすれば島民の中堅を爲すものは、一元であるか、はた又逐次に各方面から集まつたかと云ふことになる。土佐の男と能登の女と、落合つて夫婦になつたと云ふ昔話はあるが、あれは稻の種類の一番古いものに、其名が有るのから發生した傳説らしい。肅慎人が來て漁をしたことが日本紀にある。神に憎まれて空しく白

骨を留めたと語られて居るが、或は北隅の静かな灣に、多少は安住し得た者が有つたかも知れぬ。地形が其様な想像をも許すのである。さうで無くても計畫を以て大規模な移民をした形跡は見られぬから、假に後れて此島に到着した一團が時々有つたとしても、必ずしも排斥又は壓迫を受くること無しに、土著開發を爲し得る餘地は随分有つた筈である。しかうして昔の平民の婚姻慣習はまだ十分には分つて居らぬが、丸々の見ず知らずが別々に作つた村ならば、假令偶然に磯山を隔て、相隣接して居ても、其間の交通と混淆とは自ら少ないだらうから、或は將來の個人測定に由つて、存外濃厚に種族の特性を留めて居ることを見出すかも知れぬ。漠然たる觀察で豫言にもなりにくいが、鶯崎附近の海府の奥へ向ふほど、後部へ著しく發達した圓頭の多いこと、西北に面した外海府の數部落には、圓頭でしかも面長な上品な顔だちの多かつたこと、が、注意せられずには居れなかつたのである。

そこで自分の假定説を大膽に述べて見ると、此島へもやはり或時代に、海部の漂泊者が辿り著いて居る。先入の目に捉はれて居るのかも知らぬが、海府といふ外稱は偶然には起るまいと

思ふ。第二には此稱族の遠征力の旺盛で、現に日本海の多くの荒濱にも、別に政廳の介助などを須たずに、移住した前例の有ることである。それには能登の船倉島ふくしほに對する輪島の海士町の如く、最初は越後の岩船に來て住み、爰を根據として其から往來したことが、二國に相對して各々海府の地を存する原因かも知れぬ。第三には佐渡島の漁獲の豊かなこと、殊には蛇の多く取れたと云ふ點である。地曳網や磯釣だけならば海岸に住む人民は皆遣るが、水に潜る作業は今日でもまだ専門の技藝になつて居る。此島に限つて其が常人の村に發達したとは思はれぬ。併し現在最早此が行はれぬのは如何かと申せば、洋海を移動してあるく魚族と異なり、貝類などは殊に生産力が枯渴し易く、又盛衰に一の週期があるとすれば、其週期は頻繁に輪轉する道理である。此が恐くは海部の漂泊性を助長した一の事情であつて、一旦定住の境涯に入つた者に在つては、例へば人一代ほどの間、生産の減少期が続けばもう親の技能を子に傳へ得ぬこと恰も伊豆の天城が御獵地になつて三十年もたぬのに、鶯の人民に猪害を防ぐだけの鐵砲打ちも無くなつたと同じであらう。しかも佐渡の外海には山の幸も豊かであつた爲に、いつと無く

水清く日暖かな臺地を拓いて、米を作つて食ふやうになり、漁業者としては一流でも二流でも無くなつたのであらう。其改造に對する大なる便宜は、後地うしろぎがすぐに高山で、奥に入込んでも前住民の利害を異にする者が無かつたことである。もし此邊の在所に地頭と同系の農民が居たなら、魚や蛸はよく買つてくれても、木を伐り緑肥を刈り牛を放ち水を引くには、きつと大々的な故障を入れ、終に海部をして第二の浦濱を搜索せしめたかも知れぬのである。

佐渡には國人の崇敬する三座の靈山がある。中央の金北山が第一で、南の小佐渡には經塚山北の海府には光明佛がある。光明佛寺は一に山居さんきよとも稱し、東西南北四筋の參詣道は、共に海府の村を山口として居る。即ち海府の信仰生活の争者無き中心であるが、しかも此山の開基は關東にも馴染の深い相州の彈誓上人たんせいで、慶長十四年に六十三で死んだ行者である。即ち此寺の出來なかつた足利期の終までは、浮世の人には何の用も無い別天地であつたので、更に相川の後の山に光る寶の出る以前は、言はゞ海士あまでも無ければ居られぬ地方であつたかも知れぬ。今日では事情が既に變化した。自分の如き好事者流の外に、島人に取つても「海府めぐり」は年中

行事の一である。願ねがひの賽の河原には何百體の石佛がある。路傍の立石にも國中くになかと同じく、光明眞言の供養塔が多い。此三百年の同化力の後に於て、猶三日四日の旅に昔の面目を見出さうとするのは、或は性急に失した研究心かも知れぬ。後の學者に委託するの他は有るまい。

(大正九年八月、歴史と地理)

熊野路の現状

大和の初瀬の観音の後から吉張名張を経て伊勢へ詣る路は、僅かの年数ですつかり衰微した。汽車が出来て人が足を厭ふやうになつたら、忽ちにして阿保山峠の上の伊賀茶屋と伊勢茶屋とは泉も石垣も草に埋もれ、梅の古木が残つてゐるばかりである、然るに此三四年前から、春の好い季節になると遠方の人では無いが、若い者などがわざと汽車に乗らずに、遊び半分に此山路を、打連れて伊勢詣りする事が段々盛になつた。當世の語でいふと即ち遠足である。山や谷川が自然に開いた通路は、さう容易くは滅びて了ふものでは無い一つの實例で、聊か心強い感じがする。併し自分等のやうな者が此路を通ることになると、假令日數の掛るのは構はぬにしても、車が通ふか荷持があるかと先づ大きな問題である。麓まで来て引返さねばならぬやうでは

困るから、地圖の上では計畫が立てにくい。殊に紀州路は昔も今も入口が東西に一つ宛しか無くて、沿海が七十里以上もある。あんな汽船でも之を當にせぬことにすると、眞に袋の底へ入ったやうなもので、出て来る事が骨折だ。由つて新しい自分等の経験によつて、茲に當分用の案内記を拵へて置かう。

自分達は和歌山の方から入つた。汽車で南大和の古山川を見ながら往かうとしたのは先づ失敗であつた。大阪から和泉の濱を電車で行く方が奈良經過の關西線より半日以上早い。和歌山市の停車場には黒江行の電車が来て待つて居る。此城下町の今の形勢と、紀川水運の様子、及び和歌浦と紀三井寺の所謂名勝地が何ほどの物であるかは、此車の中から見て行けば十分である。陸運に引附けられて柑類の栽培が次第に和歌山の方へ寄つて來ることも一目して察せられた。新らしい木新しい種類は市に近い處ほど多い。黒江と日方は家續きの長い一筋町である。總體に山が迫つて外に線路の取りやうも無いから、漁家も商家も悉く所謂長汀曲浦に沿つて構へられてある。併し里を出離れると昔の熊野路は直に境の山を越えやうとする。車の路は其立

石を左にして濱へくと成るだけ急に阪に懸らず、且つ成るだけ多くの里を貫かうとする。里は概して小さな灣に臨んで居るのである。だから新道は快活であるが、以前の山路は同じ海と遠い國とを望むにしても、山の梢越しで遙かに幽艶の趣に富んで居るだらうと思ふ。併し磯の浪音を近く聞くのも決して悪くは無い。偶々人家の無い山の蔭などになると鴨が來て浮いてゐる。鹽津の靜かな湊には暮のことであるから、蜜柑を積む船が來て繋つて居る。路の都合で此町は家の屋根を遙か下に見て通る。宇峯と云ふ處に人力車の立場がある。黒江の電車は鹽津まで延びる豫定になつて居るが、果してどこを通つて來るものとして許されたか、自分には推測することが出来なかつた。鹽津の峯を降つて暫くは海の見えぬ谷を横ぎり、濱中の港へ行くのである。此平地なども、昔の深い入江が追々に干潟となつたものらしく、熊野繁昌の時代には、舟でなければ通らぬ横路であつたと思ふ。濱中の町にも蜜柑が黄金の山のやうに集り、之を撰り分けて船に運ぶ女の労働者が其中で働いて居る。高い好い馥がする。山路になると處々の畠にまだ採り残された果實が見える。椒と云ふ村を右斜に見て、丘の根方を傳ふ樂な路を走つて行

く。椒は即ち端神で、自分が豫想した通りの地形であつた。浦の初島の歌を想ひ出した。それから有田川の川口の塘つたの上に出て居る箕島あしの町まで、新路が新田の中を眞直に貫いて居る。箕島は蜜柑輸出の中心地を以て目せられ、小舟で川を下して来る寫眞を繪葉書にして賣つて居るが、實際の光景は見なかつた。此から先は犬が人力の綱を曳く、二人曳ほど速いけれども車賃も無暗に高い。犬の勞銀も中々よい收入である。川口の長い橋を渡ると路は近頃の堤の上に附いて居る。對岸の山は餘程上流まで果樹ばかりである。其山はもとは海に面した磯山であつたのが、有田川が自分の搬出した土で、追々と裾を延ばし、殊に左岸に大分の平地を作つたと見える。沖の島一帯の丘陵は實際海中の島であつたのを、永い年代に内陸と續くことになり、其内側に水害に罹りやすい低地の蜜柑島などが出来た。今の堤も此丘の端を便りにして築かれて居る。湯淺の盆地は僅かの高地で、此谷と水脈が分たれて居る。茲にも短距離の輕便鐵道が企てられ、糸我いとがの村はづれに少しばかりの工夫が働いて居た。まだ盛土も満足で無いのに、停車場の建物ばかりが田の中に手持無沙汰に立つて居る。電話と電燈と電車とを、無邪氣な此邊

の人は文明の全部と解して居る。しかも其動力の採用に附いては、中世式に孤立して居るから妙だ。

湯淺は寢心地の良い靜穩な町であつた。旭日の出て来る日高境の山を眺めて、どの邊を越えるのかと思つて出たら、川上に存外奥深い谷が入込んで居た。谷の口は南廣村の井關といふ部落で、此水で廣い田を作つて居る。それから津木と云ふ長い村を通るのである。昔の路も多分此筋であらう。良い路だが淋しいもので、人力車などは頓と出逢はない。右の方へ分れて由良へ越える新道が、味も模様も無く同じ勾配ですつと山を切つて登る。此方は猶更車が往くことを欲しないと云ふ。序に言ふが此邊で車を曳く犬は、先年月ヶ瀬で雇つた犬などから見ると遙か小さい。都會でならチンチンをして遊んで居る奴である。カメ中の執袴子弟である。此も車夫と同じく年々其品質に於て退歩して行くのでは無いか。かよわい者の勤勉力行は傍で見ると隨分大儀である。津木の谷は僅かの山脈を右に隔てゝ居るのに、早些も海邊の氣分がせぬ。車夫などは此邊のやうな山家ではなどゝ言ふ。村の犬は妙に耳の立ち尾の卷いた白狗が多く、

頻りに來て車の犬に威壓を加へる。其あとから鐵砲を持つた村の人が來て叱る。それは皆猪を撃ちに行くのです。此邊ではもう猪が捕れるのかい。へい仰山居りますなど、話しながら、鹿瀬峠の隧道に向つて登つて行く。トンネルの口は日高郡東内原村の原谷である。此も頗る深い入野であつて、降り降つて廣い耕地になると、御坊の町の松原越に海がチラリと見え、遠淺であるのか汽船が沖の方に來て繋つて居る。御坊はまだ大きくなりさうな町だ。縣首府の勢力が次第に弱くなるものか、町に獨立して新聞がある。田邊に行けば二つ、新宮になると四つも新聞を出して居る。町の新聞を見る人が恐らく同時に此等の町を繁榮せしめる御客で、出入の商船は寧ろ其御出入の商人であるらしい。其爲か否かは知らず、縣道はあまり埠頭とは交渉せず、左へ切れてさつさと日高川の長い橋を渡り、我々に熊野路を抄らせてくれる。茲でも清姫の越えたのは大分上流のことであらうと思ふ。此邊から濱が荒くなるからか、漁事を活計にして居るらしい民家までが、ずつと海から引込んで高みに住んで居り、路は流を越える爲に何度となく登り降りする。大體に於て手の届いた好い路だが、前年の出水に損じた處を二處ばかり

り歩かねばならぬ。印南いんなんは小ぢんまりとした港だけれど、奥在所が淺い上に砂を出す川が邪魔をする。此頃の切目川は谷が深いだけに持出す砂も多く、其砂を西の風が汰り上げて所謂由良の地を造つて居る。印南から此へ越へるには坂が稍長い。其坂の一部分の些し切通しになつた處が有名な切目王子である。切目と云ふ語も或は此地形を意味するのかも知れぬ。東國で言へば即ちウトウ坂である。切目王子は今切目明神と唱へて居る。熊野の九十九王子の衰微は、必ずしも我々が笈や頭陀袋の趣味を忘却した結果では無い。熊野を西國三十三番の打ち初にした時代にも、既に王子の社は三つに一つしか残つて居なかつた。野中とか近露ちかろとか近い頃に合祀せられた王子も甚だ多い。結局昔が多きに失したので、今が少なきに失するので無いと言へばそれ迄であるが、古い國に來て古いもの無くなつたのを見るのは、南方さんで無くても決してよい心持はせぬ。切目の濱村から、又切目崎の續きの山を越える。淋しい山路である。雨が降ると寒いけれどもやがて新年と云ふのに草紅葉が残つて居る。岩代の里中には梅も菜花も咲いて居る。岩代の早豆と云つて既に蠶豆そらまめが花盛りである。有馬皇子の結松むすびまつの古蹟も此邊にちが

ひない。荒海の滯^{ほたり}であるが故に、殊にあの歌の悲しみが身に沁みた。高野の蓮華王院の文書で夙^{もと}くから名を聞いた南部庄^{みなべのしょう}は、思ひの外に新しい町であつた。爰でも昔の船津の跡は、ずつと川上の方に求めねばなるまい。岬の路も新らしく開けたものらしく、之を廻ると最早熊野の國であるが、今では何等の氣分の變りも無しに、安々と熊野に入込んで行く。後の山々は迫つて居ても灣内が廣くて、渚に沿うた町と松原とを、忘れる程通らねば田邊には達しない。田邊の船着は秋津川の川口に近く、舊城の一角を僅かの模様替をして用ゐて居る。城の構は幾分か備後の鞆津^{とものつ}に似て居り。東國には珍しい形式である。城の要害なら寄り付き難い方がよろしい筈である。海運を主とする近世の都會の利害が、その昔の軍略上の利害と調和し得たのは不思議である。但し自分は大阪商船の營業ぶりを見て聊か發明したことがある。獨占の勢力は大きいもので打捨て、置いても客の方から頼みに来る。即ち客は熱心な寄手であるから、石垣を築いても攀ち登るかも知れぬ。和歌山から田邊へは二十五里、犬に曳かせても二日かゝる。數個の輕便鐵道を掛けるだけの資本家か政治家かで無ければ、とても犬の車賃を負擔することがな

らぬ。田邊から東へ向いては其犬にさへ別れねばならぬ。併し是が爲に大に陸運を改良しようと云ふ策略はどんなものであらうか。古來最も勇敢なる船方を出した熊野が、これでは空しく海に降伏したことになる。自分等がもし熊野人なら寧ろ進んで航路を引込み、是を我物として存分に變更利用して見たいと思ふ。

(大正三年二月、郷土研究)

峠に關する二三の考察

一 山の彼方

ピョルンソンのアルネの歌は哀調であるけれども、我々日本人にはよく其情合がわからない。日本も諾威に劣らぬ山國で、一々の盆地に一々の村、國も郡も村も多くは山脈を以て境して居るが、その山たるや大抵春は躑躅山櫻の咲く山で、決してアルネの故郷の如く越え難き雪の高嶺ではない。山の彼方の平野と海とは、登れば常に見える。他郷ながら相應の親しみがある。中世の生活を最も鮮かに寫して居る狂言記、あれを讀んで見てもよくわかるが、山一つ彼方に伯母さんがあつて酒を造つて居たり、有徳人が住んで聳を搜して居たりする。自分も子供の頃は「瓜や茄子の花さかり」とか、「おまんかわいや布さらす」とか云ふ歌の趣をよく知つてゐた。

其頃は小學校の新築の流行する時代であつた。どの山へ登つて見てもペンキ塗の偉大なる建築物が、必ず一つづつは見えた。そして振返つて見ると自分の里も美しかつたのである。

二 たわ・たま・たまり

境の山には必ず山路がある。その最初の山路は、石を切り草を拂ふだけの勞力も掛けない、唯の足跡であつたのであらうが、獸すら一筋の徑をもつのである。ましてや人は山に住んでも寂寞を厭ひ、行く人に追付き、來る人に出逢はうと力めるから、自然に羊腸が統一するのである。そのみならずどうしてこの山を越えようかと思ふ人の、考が又一つである。左右の麓を回れば暇がかゝる、正面を越えるなら谷川の川上、山の土の最も多く消磨した部分、當世の語で鞍部を通るのが一番に樂である。純日本語では之を「たわ」と云ひ（古事記）又「たをり」とも云つて居る（萬葉集）。「たわ」「たをり」は地名と爲つて諸國に存するのみならず、普通名詞としても生きて居る。鎌倉の武士大多和三郎は三浦の一族で、今の相州三浦郡武山村大字

太田和は其名字の地である。伊賀の八田から大和へ越える大多和越、其他この地名は東國にも多く、西へ行くほど猶多い。「たをり」と云ふ方では大隅の福山から日向の都城みやこのじやうへ越える小山、今は馬車の走る國道であるが、其頂上の民居を通山と云ふ。伊豫喜多郡喜多灘村大字今坊字トマリノ山、備前邑久郡裳樹村大字五助谷字通り山、美濃惠那郡靜波村大字野志字通り澤、越後南蒲原郡大崎村大字下保田字通坂、常陸那珂郡勝田村大字三反田字道理山等も皆是である。中國では峠を「たわ」又は「たを」と云ひ、其大部分は吶の字を當てゝ居る。吶は所謂鞍部の象形文字で、峠の字と同じく和製の新字である。内海を渡つて四國に入れば、「たを」とは言はずに「とう」と呼ぶけれども、「とう」は亦「たを」の再轉に相違ない。土佐の國中から穴内あなない川の溪へ越える繁藤しげとうに、肥後の人吉から日向へ越える加久藤かいくとうは、共に有名な峠であるが此藤も亦「たを」であらう。「たうげ」は「たむけ」より來た語だと云ふのは、通説ではあるが疑を容るゝ餘地がある。行路の神に手向するのは必ずしも山頂とは限らぬ。逢坂山は山城の京の境、奈良坂は大和の京の境であるから、道饗の祭をしただけで、そこが峠の頂上であつた爲で

は無からう。「たうげ」も亦「たわ」から來た語であるかも知れぬのである。

三 昔の峠と今の峠

「たわ」及「たをり」は今日の撓むと云ふ語と、語源を同じくして居ることは明かであるが、その「たわ」は山頂の線が一所たわんで低くなつて居ることを云ふのか、又は山の裾が幾重も重つて屈曲して入込んで居るのを云ふのか、何れとも決しかねる。新撰字鏡を見ると「嶼、山の豊かなる貌、山のみね、ゐたをり云々」とあり。又「堺、曲岸也、くま又たをり又ゐたをり」ともある。實際昔の人が山を越えるのには、頂上の低い所を求めると同時に、水の流に依つて奥深くまで、迷はず入り立つことの出来る所を求むべき道理である。谷川に沿つて上れば、自然に低い所を越えることになる。従つて「たわ」は頂線の「たわ」か、山側の「たわ」か容易に決しにくいのである。兎に角昔の山越は深く入つて急に越え、今の峠は浅い外山から緩く越えることは事實である。大小何れの峠を見ても舊道と新道との相違は即ち是である。峠路に限つて里程

の遠くなるのを改修と云つて居る。それと云ふのが七寸以下の勾配でなければ荷を負ふた馬が通らず、三寸の勾配でなければ荷車が通はぬとすれば、馬も車も通らぬ位の峠には一軒の休み茶屋もなく、誰しも山中に野宿はいやだから、急な坂で苦しくとも一日で越える算段をするのである。その爲には谷奥の山村は誠に重要であつた。關所のある峠は勿論のこと、關はなくとも難所と聞けば、西行も宗祇も此處へ來て一宿したからである。然るに新道が開けるとその村は不用になる。車屋あの村は何と言ふなど聞くと、それが昔の宿場であつたことも屢々である。人の智慧は切通しとなり隧道となり、散々山の容を庭木扱ひにした揚句、汽車の如きに至つては山道を平地にしてしまつた。

四 峠の衰亡

碓氷其他の坂本の宿、越後葡萄峠の如きは麓の村も衰へたが、其後に起つた山道の衰微の方が猶烈しい。一夏草を芟拂はずに置けば大道も小徑になる。山水が路上を流れて或所はすぐ河

原になる。會津の殿様の參勤道路は、赤松の並木で一部分には敷石が残つて居るのに、他の一部分はすでに谷川になつて居る。汽車は誠に縮地の術で、迂路とは思ひながら時間ははるかに少く費用は少しの餘計で行く路があつて見れば、山路に骨を折る人の少なくなるのは仕方がない。信濃佐久郡から上州武州へ越える道は澤山あつた。碓氷のすぐ南の香坂越、中島孤島君の郷里。其南に志賀越、内山峠。與地峠、武田耕雲齋の越えた道、その南に大日向等である。岩村田以南の人が江戸に出で三峯へ參詣するには、決して輕井澤へ廻らなかつたのみならず、山脈の西と東と丸々種類のちがつた産物、例へば信州の米と酒、上州の麻に煙草、江戸から來る雜貨類を互に交易する爲には、少しも中山道を利用しなかつたものが、鐵道は乃ち國境の山脈を唯の屏風にし終り、甘樂の奥の處々の米藏、佐久の馬の脊につけた三升入の酒樽を悉く閉却したのである。成程今でもちやんとした路はある。併し以前は馬主の總數に賦課した道路の修繕を今は雙方の山口の一村が引受けるのである。ゆくゆくは鶯の巢から四十雀の巢に變形して行くのは必然である。近江は四境悉く山であるが、隣國へ越へる峠路は先づ山城へ十八、伊

賀へ八、伊勢へ九、美濃へ七に越前へ六、若狹への四を合せて四十八、此中四筋は昔からの官道で、今の汽車も略之に併行して走つて居る。他の四十四の峠はとても鐵道と競争する程の捷路では無いから、身が軽く日を急ぐ者は、山元の山民でも出て來て汽車に乗る。恐らくは後來樵夫と物ずきとの外は通らぬ路になり、峠の茶屋は茶屋跡とでも云ふ地名になつて了ふことであらう。言ふ迄も無いが峠の閉塞の爲に、山村地方の受くべき經濟上の影響は非常に大である。山が深ければ農業一方の生活は管まれぬから、人をへらすか仕事を作るか、兎に角陣立を立直さねばならぬ。昔から山村に存外交易の産物が多かつたのは、正に道路の恩恵であつた。袋の底のやうになつてから、更に里の人と利を争ふのは嘸苦しいことであらう。

五 峠の裏と表

旅人は誰でも心づくべきことである。頂上に來て立ち止ると必ず今まで吹かなかつた風が吹く。テムペラメントがかりりと變る。單に日の色や陰陽の違ふのみならず、山路の光景が丸で

違つてゐる。見下す村里は却つて右左よく似て居つても、一方の平地が他の一方より高いとか一方の山側は急傾斜で他の一方は緩であるとか云ふことが著しく眼につく。是は火山國だから殊にさうなのであらう。そのみならず人の仕業の裏表と云ふものが、大抵の峠にはある。麓から頂上までの路は色々曲折して居つても、結局之を甲乙の二種に分類することが出来る。一言にしていへば、甲種は水の音の近い山道、乙種は水の音の遠い山路である。前者は頂上に近くなつて急に險しくなる路、後者は麓に近い部分が獨り險しい路である。一は低く道をつけて力めて川筋を離れまいとする故に、何度も谷水を渡らねばならぬ。他の一は此煩ひは無いが其代り見下せば千仞の云々と形容すべき、棧道又は岨路を行かねばならぬ。峠に由つては甲種と甲種、又は乙種と乙種とを結び付けたのもある。殊に新道に至つては前にも云ふ通り、乙種のものが多いけれども、古くからの峠ならば一方は甲種他方は乙種である。此を自分は峠の裏表と云ふのである。表口と云ふのは登りに開いた路で、裏口と云ふのは降りに開いた乙種の路である。初めて山越えを企てる者は、眼界の展開すべき相應の高さに達する迄は、川筋に離れ

ては路に迷ふが故に、出来るだけ其岸を行くわけであるが、いざ此から下りとなれば、麓の平地に目標を付けて置いて、それを見ながら下りの方が便である。それは第一に足が沾したくない上に、山の皺と云ふものは裾になる程多いから、上で一回廻るべき角は、中腹以下で數回廻らねばならぬ爲である。故に折角分水線の最低部に到達して置きながら、更に尾根づたひに高みへ上つた上で始めて降路を求めものもある。即ち鞍部では十分に見通しのつかぬ處から、わざ／＼骨を折つて乾いた小路を捜すのである。右の如く解すれば同じ峠路の彼方此方でも、先づ往來を開きかけたアクチーフの側と、之を受け之を利用したるパッシーフの側とは分明であつて、少なくとも初期の經濟事情を知ることが出来るのである。實例を擧げて今この路が古道でないとすればむだになるが、相模の佐野川村から武藏の元八王寺村へ越える案外峠は、案外にも武藏が表で相模が裏、越中の國境莊川の上流に横はつて居る尾瀬峠は、平野地方が裏で五箇山の山村が表であるのはさもありなん。羽後由利郡の本莊西方から、雄物川平原の淺舞横手へ越える峠は、海岸部の方が表口、肥後山鹿の奥岳間村から筑後の矢部へ越える冬野の山道

は、複雑して居たが肥後の方が表だつたと記憶する。日本國の峠の数は大小一萬ばかりもあるであらう。誰か統計を取つて表を作つて見る篤志家はあるまいか。

六 峠の趣味

自分の空想は一つ峠會と云ふものを組織し、山岳會の向ふを張り、夏季休暇には徽章か何かをつけて珍しい峠を越え、その報告をしやれた文章で發表させることである。何時の表七分の六の左側に雪が電車の屋根ほど残つて居たなど云ふと、そりや愉快だつたらうなど、仲間で喝采するのである。嗚かし人望の無い入會希望者の少ない會になるであらう。冗談は抜きにして峠越えの無い旅行は、正に留のない饅頭である。昇りは苦しいと云つても、曲り角から先の路の附け方を、想像するだけでも楽しみがある。峠の茶屋は兩方の平野の文明が、半は争ひ半は調和して居る所である。殊に氣分の移り方が面白い。更に下りとなれば何のことは無い、成長して行く快い夢である。頂上は風が強く笹がちで鳥屋の跡などがある。少し下れば枯木澤山の

原始林、それから植ゑた林、桑畑と麥畠、辻堂と二三の人家、鶏と子供、木の橋、小さな田、水車、商人の荷車、寺藪、小學校のある村と耕地と町。こんなのが先づ普通である。だから峠の一方の側が急なら急な方から上り、表と裏とあれば裏の方から昇つて、緩々と水に沿うて下つて来るやうに路順をこしらへることを力めねばならぬ。筑波神社の寶物に唐人の繪卷がある開けば卷頭には、奥山の岩本清水、青羅白雲猿の聲も聞ゆるやうな風景である。この水が段々と集つて淵を爲し、松と岩との間を行くと、樵夫が徒渉し、隱者が腰をかけて居る。次には溪の處に樵夫の來た徑があり、人家があつて牛が行き、更に漁舟を浮べて居る者があり、橋が架つて車が渡り、橋の下までは帆をかけた舟がのぼり、堤が低くなつて水田が廣く見え、城壁の下を流れて都府に入れば、岸には子供が集つて輕業師の藝を見て居る。狗が尾を振つて居る。柳があつて青樓が列り、其先は即ち河口の港で、遠洋から歸つた軍艦商船が碇を卸して居るといふ趣向である。繪卷物の無い國の人には解し得られない興味である。併し繪なれば高々二十尺、二十五尺の、絹の上の變化であるが、天然は更に豊かである、同じ一つの峠路でも、時代

及び人の生活、季節晴雨のかはる毎に、日毎に色々の繪卷を我々に示して盡きないのである。

(明治四十三年三月、太陽)

秋風帖

昭和十五年三月廿五日 印刷
昭和十五年三月卅日 發行

定價 壹圓

著者 柳田國男

發行者 東京市四谷區愛住町十九番地
矢部良策

印刷者 東京市芝區濱松町一丁目十三番地
植田庄助

版元

東京市四谷區愛住町十九番地
大阪府西區新町南一ノ四

株式會社 創元社

振替東京一五六五番 電話四谷八三八一
振替大阪五七〇九九番 電話新町六六〇三番

刷印堂文成

創元選書の刊行について

良書は永遠の若さに輝き、萬人に必讀さるることを深く欲する。如何なる新しきものよりも常に新しく、あらゆる文化の源泉となつて盡くすることを知らない。良書の普及こそは身を出版にささげる者の片時も忘るることを得ない責務である。吾人は絶えずその點に留意し、あくまで公明なる手段と眞摯なる努力を以て、躍進日本の要望に副ひ、且出版事業の眞使命に戻らざらんことを念願として來た。

如上の微意に基き吾人はここに『創元選書』を刊行せんとする。收むる所は眞に萬人の血となり肉となるべきあらゆる種類の良書であ

るが、これが選擇には獨自の立場から慎重なる検討を重ね、有名無名たるを問はず、専らその本質的價値にのみよる可きことを主眼としたものである。しかも體裁の典雅、印刷の鮮明、製本の堅牢、價格の低下等に細心の注意をはらひ、飽くまでも世の讀書子の共有たらんことを期した。吾人は本選書が微力ながらも國民の教養を高め、正しき批判的精神と良心的行動との良き指針の一助ともなり、將來日本の文化建設の礎石とならんことを切望して歎まぬ。

昭和十三年十二月

創元選書既刊目錄

柳田國男著 昔話と文學 (1)

本邦民俗學の泰斗たる柳田先生が、昔話と文學との間の未決着な諸問題を、驚くべき豊富な資料から究明し、わが民族の過去に於ける精神生活を明瞭にすると共に言語藝術としての文學の將來をも暗示されたもの。

送料價 一圓二十錢

野上豊一郎著 世阿彌元清 (2)

世阿彌の組織立てた藝術理論は日本の全ての藝術表現の原理として現代でも普遍的と認められる。世阿彌を多年研究せる野上氏の本書は、現在に於ける最も信頼すべき世阿彌傳であり、中世文化の一側面史である。

送料價 一圓

宇野浩二著 ゴゴリ (3)

宇野氏は多年ゴゴリに私淑し、日本のゴゴリと言はれ、その抒情的才能と諷刺的才能とはゴゴリを彷彿させる。氏は不幸な一生を送つたゴゴリの人とその作品に就いて、前人未踏の傳記文學を打ち樹てた。

送料價 一圓二十錢

横光利一著 家族會議 (4)

東京と大阪との商人氣質、習慣、家法などの對立を緯とし、男女人物の道義と愛情との衝突を經とした横光氏が苦心の小説であつて、恰も近松の世話物にも匹敵する構想の妙と文藻の美を心ゆくまで發揮せる名篇。

送料價 一圓五十錢

小林秀雄著 文學 (5)

批評家とは言へば小林氏は現代のどの作家よりも作家らしい活動をしてゐる。世の俗論に對して痛烈な批評を加へた本書は、現代日本の誠實な良心に與へる貴重な警告であり、新文化創造のためのよき糧であらう。

送料價 一圓

創元選書既刊目錄

西ハクスレイ著 思想の遍歴 (6) 送料價 十圓二十錢
 現代英國作家のうち最も鋭い對社會的な感覺をもつてその行詰りと頽廢を感じてゐるハクスレイが、知性、理想、歴史、音樂、風俗、社會理論、教育、經濟、心理、政治、倫理に就てもらした小論隨想を集む。

河上徹太郎著 音樂と文化 (7) 送料價 十圓二十錢
 河上氏はわが樂壇の致命的な缺陷を指摘し、良識の必要を極力主張して歌まな文化的自覺に多大なる影響を與へるであらう。この個性的な情熱は一般人の

谷崎潤一郎著 春の琴抄 (8) 送料價 七十五錢
 谷崎氏が齡漸く老境に入ると共に作風一轉期を劃し、すぐれた物語的主題と肉感的現實を含んだ傑作を續々と世に示した。「春の琴抄」はその期に於ける氏の最大傑作である。氏の文章は讀者を陶酔させるであらう。

チエーホフ著 手帖 (9) 送料價 十一圓
 本書にはチエーホフの隨感、作品の腹案、スケッチ、心覚え、を書きとめた私録と、彼の興味ある日記とを抄録す。發表を夢にも豫想しないものだけに却て作家チエーホフの秘密の匂ひが高く且純粹である。

フロオベル著 サンドへの書簡 (10) 送料價 十圓二十錢
 巨匠フロオベルが、閑秀作家ジョルジュ・サンドに宛てた書簡を纏めて一卷としたものである。實生活に訣別し、作品の上で「自己」を生かしたフロオベルの文學觀、人生觀、戀愛觀が躍如として流れてゐる。

創元選書既刊目錄

辰野隆共著 モリエール (11) 送料價 十一圓
 批評家ボアロオをして十七世紀最高の詩人と讃嘆せしめた大喜劇作者モリエールの全貌が、辰野教授と本田氏の協力によつて茲に餘蘊なく描き出された。フラスノ文學愛好家は勿論一般讀者人が座右の書である。

岡倉天心著 東洋の理想 (12) 送料價 十一圓
 この書は美術史といふよりも寧ろ精神史である。識見の廣大卓拔は東洋美術の粹となつて高らかな理想の歌を聞く思ひがあり、全篇を貫流する浪漫的情熱の高鳴りは、讀者をして思はず感奮せしめるであらう。

三好達治著 春の岬 (13) 送料價 十一圓
 文學の文學ともいふべき近代抒情詩の大道を悠々濶歩してゐる著者の詩境は、何人の追隨をも許さぬ高次のものである。この一卷の詩集は、著者が青春の日のかたみであると共に萬人の心に宿る青春の姿でもある。

大ア岡昇平著 スタンドアル (14) 送料價 八十五錢
 本書はフランス評論壇の耆宿アランが、豫て師と呼んでゐた心理小説の巨匠スタンダールの、懇切丁寧に興味深く分析した文學的、最上級の結晶であり、一大權威書である。眞理を探究して止まぬ彼の面目躍如たり。

柳田國男著 木綿以前の事 (15) 送料價 十圓五十錢
 本書は一代の碩學が廻りくどの論理を排し具體と實證とを以て、有りとあらゆる前代の無名無数の母や、姉妹の身の上が残りなく見渡しし探上げられてゐると言ふ、俳諧の奥を探つて紅紫とりくくの女性の歴史を闡明しようとしたものである。